



# 想いつくまま

—30年間お世話になって—

高藤昌和



# 想いつくまま

—30年間お世話になって—

高 藤 昌 和



## 発刊のご挨拶

高藤建設株式会社

代表取締役社長 高 藤 元太郎

当社の高藤昌和会長が昭和五十四年社長に就任し、三十年に亘り当社の機関紙「藤友」を通して、「社長のひとこと」として、読者の皆さんにメッセージを送り続けていました。

それを今回、会長就任の記念として一冊の本に編纂致しました。当時の昌和社長の経営に対する想いや、社員への熱い想いが、人生訓として語られております。平成の元号も、早や二十一歳を過ぎ、世界的な不況の渦中にありますが、私どもの業界も例外ではありません。

今日のような混沌とした時代にも通じるメッセージだと思い、今後もわが社の企業経営の指針と致しております。またこの本の発刊を通して、何か社会にお役に立てることができれば幸いです。

# 目次

発刊のご挨拶

チャレンジする人生を

価値観について

安全は経営の原点

「三つの気」元気 勇氣 根気

因果律 現在⇄過去⇄未来

いろはかるた

八甲田山

土壌あつての「背水の陣」

目的と手段・心と物

人を生かすリーダーとは (一)

人を生かすリーダーとは (二)

..... 1

..... 3

..... 5

..... 7

..... 9

..... 11

..... 15

..... 17

..... 19

..... 21

..... 25

人を生かすリーダーとは (三)	29
人を生かすリーダーとは (四)	31
中国の先生―武君に学んだこと	33
「差」と「違い」	35
動機と過程と結果	37
無形の財産	39
漢字の深意	41
自助努力	43
悪循環と善循環	45
心眼	47
道	49
タイミンゲ	51
明日は明るく	53
自分の価値は他人が決める	55

対岸の火事 他山の石	57
四ツの気で挑戦	59
至言・コック長	61
変革の時代こそ 発展のチャンス	63
一九、七三三日	65
心の健康を	67
守節	69
バランス	71
可 <sup>イエス</sup> と否 <sup>イイ</sup> の土壌	73
創るのは数、求めるのは一人	75
意中有人	77
物心ともに豊かな「平成」へ	79
着眼大局	81
コントロール	83



社徳	85
応変力	87
問われる豊かさ	89
壁を破る	91
交わり	93
試練をバネに	95
時代の風	97
全・長・根	99
親の魂	101
自然を感じる	103
企業の使命	105
殻を破る	107
使命	109
絆	111

基盤	113
バカンスとトラバユ	115
まさかの時代	117
確信のない時代	119
場の成長	121
本来の姿	123
劣化現象	125
村八分	127
ウサギとカメ	129
踊り場	131
ライトアップ	133
覚醒 <small>かくせい</small> —めざめ	135
選択の時代	137
艱難	139

半世紀	141
漂流の時代	143
エレベーター人間	145
人生とは	147
責任と愛	151
ディスカバー	153
不易流行	155
寅さん	157
保自から保全へ	159
光と影(闇)	161
新世紀	163
共同体	165
脳力と心力	167
因・縁・果報	169

立志	171
「和魂洋才」	173
真我	175
人間の重さ	177
塞翁が馬	179
北極星	181
志の風化	183
内（心）と外（現実）	185
希望	187
人事を尽くして天命を待つ	189
擬（もどき）	191
困難・試練・後悔・失敗	193
欲望とコントロール	195
成功は失敗のもと	197

内（心）と外（現実）をつなぐ	199
諸行無常	201
仕方がある	203
二十一世紀の羅針盤	205
私変わります	207
お天道様はお見通し	209
求心力	211
再生	213
自己ベスト	215
変革	217
孤独と刹那	219
魂願	221
原点回帰	223
チェンジ（変化）	225

エネルギー	227
もったいない	229
「和を以って貴し」	231
八つの珠	233
「善玉」と「悪玉」	235
「腑に落ちない」	237
比較の価値観	239
「成功」と「失敗」	241
負（陰）の現実	243
バラバラの時代	245
「風」	247
「価値破壊」	249



## チャレンジする人生を

人間というのは、本来、非常に現状を固定化する性質が、あるのかもしれませんが。それで何か新しいことを実行しようとする、まずその困難性に注目します。実現不可能であることを、いろいろと理由づけて、可能性を見出すことは、なかなか着眼しません。

しかし人間は必ず死ぬのですから、可能性を見つけてチャレンジする人生の方が、よっぽど楽しいと思います。勿論、その結果、失敗するかもしれませんが、しかし何もしなくて失敗をしないことよりも、失敗したことを生かして、次の機会に役立てれば、その失敗はいい教訓となつて一生残るでしょう。人間は考え方によって、どうにでもなるものです。

先日ある新聞に、法人企業の二社に一社が、赤字決算であると書かれていました。この記事を読んで、二社に一社が赤字なら「我が社も赤字決算でも仕方がない」「景気が悪いから」とか「原料が値上りしたので」あるいは「金利が高くなったので…」と考えるのもひとつの考え方です。



しかし、逆に考えれば、二社に一社は黒字決算ということですので「我が社も黒字決算をせねば」と考え、同じ条件でなぜこうも違うのかと反省し、可能性にチャレンジすることの方が経営の真骨頂ではありますまいか。

「よく膏藥といいわけはどこにでも着く」と言いますが、結局は自分自身の考え方の問題であり、自分自身との戦いです。

人生を修業の場と考えることが大切です。無限の未来を秘めた若者が、大志を抱いて人生に挑戦する姿、それが青春です。そういう意味では、青春とは年齢に関係なく、常に可能性を求めてチャレンジする人はいつも若く、まさに青春は心の様相です。「もう」ではなく「まだ」という人生を送って下さい。未来を信じ未来に生きようではありませんか。

## 価値観について

人間関係の中で、最も大切なことは、価値観が合うか？合わないか？ということではないでしょうか。よく性格の不一致といいますが、それも煎じ詰めれば価値観の違いからくるものです。親子、兄弟、夫婦、友人、上司、部下その他いろいろな人間関係で、価値観が一致することが必要です。それは大きくは人生について、社会人として結婚、子供、金銭、仕事、あらゆることと言えることです。

どんな価値観をもつかは人それぞれ自由ですが、高度成長期には、物さえあればといった考え方から、資源有限時代といわれる現在では、もっと精神的な心の内面的な方へ、価値観を転換する必要があります。NHKのドラマ「おんな太閤記」で、晩年の秀吉と秀長、ねね、利休等との考え方の違いも、価値観の違いからくるものです。

そういう意味では、我が社でも価値観を統一し、社会とかユーザーに対する使命、役割を全員がよく再認識せねばなりません。

今年是我が社創立三十五周年を迎えましたが、ここで原点にかえって反省する必要があります。藤吉郎と秀吉は別人であると言われるのも、初心を忘れたからであり、価値観も変わってしまったからです。

どんなに世の中が変わっても、不変な真理や価値観はあるはずです。それを忘れた時に企業も、社会も、国家も崩壊するのです。これを機に反省と、次の四十年、五十年への再出発の年にしたいと思います。



## 安全は経営の原点

安全は経営の原点である。それは人命尊重という、根本理念に基づくものであり、結果として安全は利益につながるものだからです。

企業の安全成績と企業の利益は、比例するものであり、安全成績の悪い企業ほど、体質が弱いと言われるのはそのためです。何故ならば安全は労使はもとより、協力業者や家族・得意先・地域社会など、あらゆる人の共通の目的になるからです。

どんなに多様化する価値観の中でも、常に不変なものは安全であり災害ゼロなのです。ですから安全は「一体感」や、統一行動をするための大前提となり得るのです。統一行動をすると、やがて心に影響を受け企業全体に「一体感」や「連帯感」が生れて来ます。そういう企業は結果として、利益を得る企業となるでしょう。

安全を追求すれば、コストダウンになり、品質の向上に結びつきます。実際に災害は、物と人との物理的な現象で発生するのですから、例えば計画的に、段取りよく次の工程を

考えて資材配置をすれば、それは安全とコストダウンにつながります。整理整頓も、安全通路の確保も作業能率の向上になります。

従って、最近各社ではTQCなどを通じて、企業の体質強化を行っていますが、煎じ詰めればどれも当たり前前のことを、当たり前前に実行し、小さな努力を積み重ねることに尽きます。それが安全成績の向上と、利益の向上という両方の目標を達成することになります。

ともあれ「安全」は経営の原点であり、災害ゼロへの挑戦に今年もベストを尽くします。  
“安全はあなたが主役、全員参加の安全を”



## 「三つの気」

### 元気 勇氣 根気

NHKの大河ドラマ「峠の群像」に象徴されるごとく、世はまさに昭和元祿の終わりを迎えようとし、これからは昭和の享保期に入ることになりましょう。やがて天明、嘉永、安政と続き、混乱、変化の時代を経て、その後新しい明治維新を迎えることと思います。

さて、この時にいかに対処するか？もちろん、次に来る危機や変化を予知、予測し、回避、防止し、また対処等が考えられますけれども、それ以前の問題として次の三つの「気」が必要でです。

〈元気〉 まず気のはじめは元気です。特にリーダーに元気がないと、その集団は気落ちして陰気な雰囲気になります。まず始めにこの「気」、即ち「元気」が必要です。

〈勇氣〉 第二次大戦中、ロンドンがドイツ空軍の猛爆撃を受け、国民が意気消沈していた時のことです。あの名宰相チャーチルは「金を失うことは小さく失うことである。名誉

を失うことは大きく失うことである。しかし、国民が勇気を失った時に、英国はすべてを失う」と激励し、国民の士気を鼓舞して、ついに困難を乗り越え、勝利を得たのは有名な話です。これから次々とやって来る苦難に、私達は勇気をもってチャレンジし、小さなことから実行することが大切です。

〈根気〉 短い期間なら誰でも出来るでしょうが、それを持続することは難しいことです。ある日本人旅行者がイギリスで素晴らしい芝生を見て「どうしたらこんなになりっぱな芝生に育つのですか？」と質問したところ、イギリス人は「いや別に難しいことはありません。ただ水をやり、草を抜き、肥料を与えるだけです」と答えたそうですが、最後に一言「百年間続けています」と事もなげに言ったそうです。まさに根気そのものではありませんか。継続は力なり。ゴールを目指して、半歩でも一歩でも進むことです。

明るい話の少ない最近ですが、「三つの気」を忘れずに進みたいと思います。

## 因果律

### 現在 || 過去 || 未来

悠久の過去から現在、永遠の未来にかけて、森羅万象、すべて因果律によって動かされている気がします。因果律とは言うまでもなく、物事はすべて原因がなくては生じないという法則です。

現在の現象は過去の原因によつてなり、また未来は現在が原因となつて、将来必ず結果に現れます。

そういう意味で私がこの事を最も感じたのは、学生時代最後の年でした。私の友人で、日頃からコツコツと努力を重ねている彼が、一流企業に同時に合格し、どちらを選ぶかとうれしい悲鳴をあげている時です。当時（昭和三十一年）は現在と違って就職難といわれた時代で、いい加減に学生時代を過ぎた私には、一流企業には受験のチャンスもなく、つくづく因果律ということを知らされ、案外、世間は公平なものだと思いました。これも



四年間の学生生活が原因で、卒業時に結果が現れたのです。

この因果律は、人間にも企業にも、社会でも国家でも同じ事が言えると思います。巨人軍の王選手の記録も、夜中にバットを振る努力の原因によつて、大スターの道へつながつたのです。

今年も新入社員を迎えましたが、この社員が定年退職で我が社を去つて行く時に、自分の人生を振り返り、素晴らしい人生であつたと言えるかどうか。また我が社がそれに応える我が社であるかどうか、反省させられます。

ともあれ、将来のため、今なすべきことを確実に実行することが必要だと思ひます。

『永遠の未来へ向かつて限りなき前進を』

## いろはかるた

最近、戦前の子供達の遊び「いろはかるた」を思い出しているうちに、平易で簡単なながら、人生について、絶妙の真理を言い得ていることに気付きました。昔の人は、子供達の遊びの中にも、含蓄の深い教訓を織り込んでいることに改めて感心しました。例えば、

**せ** 千里の道も一歩から

遠い所へ行くのもまず足元の一歩から始まり、どんな大事業でも一歩一歩着実に努めることが大切だと教えています。また、

**か** 勝って兜の緒を締めよ

戦いに勝って、ホッと一息ついて兜を脱いだ時、不意に敵に襲われない用心が、大切だということ、事業でも順風満帆の時ほど、注意せよという戒めと解します。

**の** 喉元すぎれば熱さを忘れる

どんな苦しいことでも、その時を過ごしてしまえば後はすぐ忘れてしまう。常に創業の

原点に戻り、ユーザーを大切にすることを忘れるなどの教訓です。

な 情けは人の為にならず

他人の為に尽くすことは、結果として自分の為に尽くすことである。

こ 転ばぬ先の杖

どんな不況が来ても耐えられるよう、常日頃から心の準備をし、節約をして有事に備えよということ。その他、

ま まかぬ種ははえぬ

ら 楽は苦の種、苦は楽の種

ゆ 油断大敵

そ 備えあれば憂いなし

き 勤儉貯蓄

し 失敗は成功のもと

ひ 人の振り見て我が振り直せ

ち 塵も積もれば山となる

み 身から出た錆

あ 案ずるより産むが易し

す 好きこそ物の上手なれ

た 大欲は無欲に似たり

て 天は自ら助くる者を助く

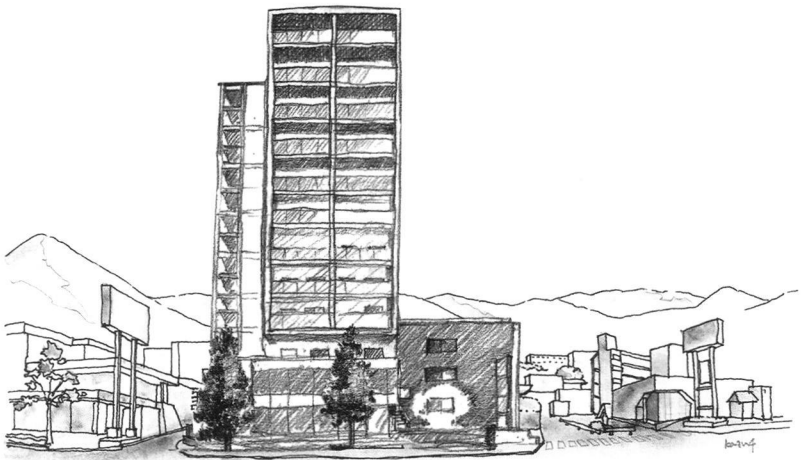
む 無理が通れば道理が引込む

さ 三人寄れば文珠の知恵

等々、家庭にも社会にも企業にもすぐに役立つ真理ばかりです。先人が長い歴史と人生経験の中から学んだ生き方について、分かり易くかみくだいて作ってある「いろはかるた」を今一度見直す必要があります。ともあれ、

へ 下手の長談義

この辺で…。



## 八甲田山

秋の夜長、テレビのチャンネルをひねっていると、丁度映画「八甲田山」が放映されていました。以前に映画でも見、本も読んだのですが、この日もまた、何かひきつけられる様な気持で三時間、テレビに夢中で見入りました。

それは、時代の背景が、あまりにも現在の流れを反映しているからかもしれません。世界的な政情不安と経済の混乱、同時に国内的にも財政破綻と赤字国債、円安、消費の停滞等々大きな困難に直面しており、まさに八甲田山雪中行軍を思わせる今日この頃です。

感想を一言で言えば、指揮官の判断いかんで成功もし、失敗もするということです。「一人によって國が興り、一人によって國が滅びる」といいますが、リーダーの責任の重大さをいやというほど考えさせられました。状況判断の誤りは、大きな犠牲をしいることになります。

第二点は、指揮官の人格ということです。常に謙虚で他人の意見を聞き、案内人に対し

でも礼を尽し感謝の気持を素直に表わすという、あの素晴らしい人間性です。それが全体のチームワークの源泉になっているのです。

第三点は、困難に遭遇した時の精神力の重要性です。もうだめだと思った時に滅亡するのです。冷静な判断と強靱な精神力がリーダーには要求されます。

先日、ラグビー日本一の、新日鉄釜石のプレイングマネージャーであった森さんの講演を聞きました。その中で「最も大切なことは、技術的、肉体的に劣っていても、それはトレーニングによって克服できるが、精神的に負けたらそのチームには絶対勝てない。まず相手に勝つためには、精神的に勝つことである」と話されましたが、まさにその通りです。

これから始まる我が社の『八甲田山雪中行軍』をいかに安全に、確実に走破するか？肩にズシッと重みを感じず秋の夜でした。

「リーダーが神を恐れないと独裁者になる」

## 土壌あつての “背水の陣”

先日、ある都銀の広報誌を見えますと「背水の陣にみる用意周到」という記事が掲載されてきました。その中に「例えば蛇は獲物をとる時を除いて外敵に出会ったら、いち早く逃げだしてしまう。逃げられない時は、盛んに警告を発して、できるだけトラブルをさけようとする。ガラガラ蛇のあの音は襲撃の前ぶれでなくて、実はトラブルをさけようとする警告なのだ。

全く同じように人間も絶えず逃げ出そうとしている。時には自分自身からの逃走さえ企んでいる。

困難に挑戦するということは実に至難なことである。“背水の陣”とは、普通、布陣は山を背に水沢を前にするのが、良いとされているが、これは前は敵の大軍、背後には水深く流れる急な川で、すでに退路はないという状況で、死にもぐるいでぶつかる以外にない」と書かれています。なるほど背水の陣も必要ですが、その前に兵士の志気が高く祖国を愛し、



親兄弟を愛し戦う集団である事、その土壌であることが、大前提ではないでしょうか。どんな形をとつても、どんな手を打つても土壌がなければ敗れるでしょう。その良い土壌作り、それはリーダーの責任です。

“どんな良い種も

良い土壌がなければ育たない”



## 目的と手段・心と物

「衣食足りて礼節を知る」という言葉がありますが、最近の世相は、全く逆の現象があらわれ、豊かさの中で、混乱と深刻な社会問題が生じています。

ある人は今までは、貧しさの体験はあっても、豊かさの体験は未知の世界であり、貧しさの中での、道徳や倫理はあっても、豊かさの中での倫理は持たないので、暗中模索の状態であり、陣痛の苦しみを味わっていると言います。またある人は、心と物のバランスがくずれ、物欲が先行し、精神的な面がいつて行けない状態だと云います。いずれも真実だと思います。

本来、人間は、幸福に平和に暮らすということは、古今東西、人類共通の願いであり、目的です。そのための手段として物と金が必要であって、それ自体目的ではないのです。しかし、物と金を求めることが目的となり、そのために目的と手段が入れ替わっているのが現在であり、その結果「衣食住足りて、礼節を失う」ということになったのではないで

しょうか？

ですから、物質的に豊かな先進国の方が発展途上国よりも、道徳や倫理の面では混乱が大きいのだと思います。目的と手段を履き違えている社会では、永遠に平和は来ないでしょう。

我々も今一度、原点にかえって反省し、人間はいかに生きるべきか？どうあるべきか？真剣に考える時だと思えます。

“極まれば変ず、変じざれば滅す”



## 人を生かすリーダーとは（一）

我々は案外気がつかないところで、人の一生を台無しにしている事があるのではないのでしょうか？

子供や社員、友人などに大きな犠牲を強いているのかもしれませんが。

① 自分に厳しく他人に寛大にという言葉がありますが、逆に自分に甘く他人に厳しくということを知らず知らずにやっています。

部下に対して、こんなケースが意外と多いのではないのでしょうか。それは組織を破壊し、士気を低下させます。自ら率先垂範、自分に厳しく行動することです。

「愧<sup>かひ</sup>より始めよ」

② 天は二物を与えず（部下の長所を伸ばす）

天は二物を与えないけれども、逆に言う天一物を与えているということです。部下の一物（長所）を見つけ、それを伸ばすことが部下を生かせるリーダーです。

短所や欠点だけを見つけて指摘するリーダーは、その人の才能を殺していることになり  
ます。勿論短所や欠点を直すことは必要ですが、長所を伸ばすことによって短所や欠点は  
是正されるものです。

「他人の欠点や短所はよく見えるが、自分のことは分からない」

③ 功は部下に、責任は自分に

手柄は自分のものとし、責任は部下に押しつけるということを、平気でやっているかも  
知れません。それは部下にやる気を失わせ、信頼感のない烏合の集団となるでしょう。部  
下に存分に能力を発揮させ、功績は部下に与え、責任は自分で取るというリーダーは、そ  
の集団に活力の源泉となります。

「人の評価は他人が決める」

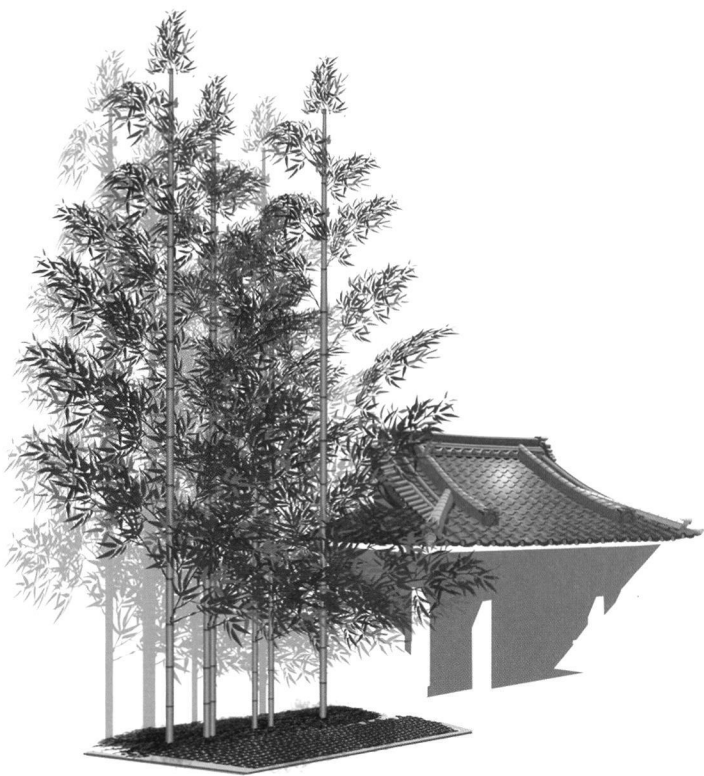
④ 肩書きと人間の価値とは全く無関係である。

我々は、人の価値をその人の肩書きによって決めている場合があります。しかし肩書き  
というのは、その人の人間的な価値とは無関係です。肩書きはなくとも、りっぱな人はた

くさんいます。

ですから部下の中にも、自分より立派な人はたくさんいます。(年齢、性別とも関係なく)  
そのことを認識する必要があります。

「裸になった時、人間の価値は判る」



## 人を生かすリーダーとは (二)

⑤ 先入観で人を判断するな (固定観念を捨てよ)

森羅万象、ひとときとして同じことはありません。常に変化し続けているのです。庭の木でも毎日観察しているとわかりませんが、一年、二年と年月が経過すると成長したことがわかります。人間も同じことです。以前こうであったから、今もこうであるということはありません。良きにつけ、悪しきにつけ変わっています。

ですから、先入観や固定観念で部下を決めつけると間違いです。よく他人の話だけで、また自分自身の固定観念で判断し、見ると聞くとは大違いということがありますが、常に変化していることに注意すべきです。

⑥ 最も多く包容する者が最も偉大なリーダーとなる

リーダーの条件の中でも重要な事の一つに “公平” でなければなりません。好き嫌いの激しいリーダーは組織を破壊し、側近を固め派閥を作り、エネルギーを分散させます。戦



国武将でも、いつまでも敵を敵として残しておくで発展しません。敵も味方にし、包容して行く秀吉や家康のようなリーダーでないと天下は統一出来ません。自分の気に入った人間だけを尊重するリーダーは危険です。

“人それぞれ、花それぞれ、それぞれに咲く” という言葉がありますが、人それぞれ良い面をもっているのです、それを生かして咲かせるリーダーが必要です。丁度、オーケストラの演奏が一つ一つ異なった楽器の音色により、全体として素晴らしいハーモニーになる様に、一人ひとりの異なった能力を調和して活力ある組織作りが大切です。

⑦ 部下は上司を選べない

部下を責める前に、自分自身が反省する必要があります。有能な社員が上司に恵まれなために埋もれてしまう場合があります。

先日、ある本で、松下幸之助さんが「もし部下に『箸にも棒にもかからない』社員がいたら全部自分のところに連れて来い」と言い、その社員を立派に生かして能力を発揮させるということを書いておられました。立派な才能を殺す上司だと大変です。部下を責める

前に自分が反省し “部下は上司を選べない” ということを常に念頭に置いておく必要があります。



## 人を生かすリーダーとは (三)

⑧ 子供は鏡です。自分が写っていると思いなさい。子供は親のいうことは聞かぬが、親のする通りにはする

昭和三十八年五月のことですから、もう二十年以上も前のことですが、鎮西女子学園管理棟の工事の際、浄土真宗本願寺派の総長もされた故・田丸道忍先生と一夜宴席をともにする機会に恵まれました。丁度その頃、私の長女が誕生して間もなくの頃でしたので、先生に子供を育てるにはどうしたらいいですか?と質問しました。

先生はニッコリと笑みを浮かべながら「子供というのは、自分が写っている鏡です。子供は親のいう事は決して聞かない。けれども、親のする通りにはしますよ」といわれました。あれから二十年、不肖の子も二十歳になり、反省するこの頃ですが、その言葉の真意が今、わかるような気がします。

さて、この言葉を置きかえて「部下というのは鏡であり、上司が写っていると思いなさい。

部下は上司のいう事は聞かないが、上司のする通りにする」となると、部下を責める前に自分を責める方が正しいということに気づきます。

“勇将のもとに弱卒なし”とか“魚は頭から腐る”といわれますが、リーダーの責任がいかに重いか？ということを教えられます。

西武ライオンズの田淵選手が、立派なリーダーに恵まれ別人の様に大活躍をしている姿をみるにつけ、人を生かすリーダーと、やたら逸材を埋もれさすリーダーとは？反省と責任の重大さを感じる秋の夜長です。

## 人を生かすリーダーとは（四）

「人格がすべて」

人を感動さすものは理屈ではなくて、人格の力である

人物論では第一人者である故人伊藤肇先生の著「人間の魅力の研究」の中に、西郷隆盛のことが書いてあります。西南の役に敗れ、軍を解散することに決め、まず他郷出身者から帰すことになった。その中に豊前中津隊があり、隊員たちはそれぞれ帰郷することになったが、隊長の増田栄太郎だけ「残る」といったのである。

「君たちは隊員であつたから西郷という人を知らない。自分はたまたま隊長を引き受けたために、軍議の席に連なり、西郷先生に接することが出来た。先生に接してしまつた以上、もはやどうすることも出来ないのだ」といい、「かの人ハマことに妙である。一日かの人に接すれば一日の愛生ず。三日かの人に接すれば三日の愛生ず。しかれども予は接する日を重ねて、もはや去るべくもあらず。今は善悪を越えて、かの人と生死を共にするほかはない」

と言つて涙を流したという事です。

何が増田隊長をしてそんなに心を動かされたのか――。

それは、西郷隆盛の人間的魅力と人格の力以外にはないと思います。頭がいいとか、金を持つているとか、地位や名誉があるとか、権力だけでは人は動きません。

ですから結局、人を生かすリーダーとは、その人の人格がすべてです。人生を修業の場であることと認識し、自らの人格を向上させることがリーダーの最大の責務です。未熟ものでしょうもない煩惱に苦しみながら半歩でも一歩でも前進することしか道はないと確信します。



## 中国の先生——武君に学んだこと

先日、武保和君が、帰国記念に植樹をした山茶花の赤い花が咲いているのを見て、武君のことを思い出しました。

昨年十一月二十一日、晩秋の爽やかな秋風とともに日本を去って、早くも半年の歳月が流れました。日本で建築技術と日本語を学んで、中国の建設に役立ち、日中永遠の平和のかけ橋になるということで、我が社で一年五カ月、ともに勤務しました。

彼の真面目な生活態度、向学心に燃えた瞳、常に前向きに取り組むチャレンジ精神。遠い異郷で、言葉もわからない、環境も違う中で、よく頑張ったものだと思改めて畏敬してきます。それにも増して、私欲を捨てて祖国の建設に少しでも貢献したいという心には、豊かな物質文明の中で、昭和元祿の太平の夢にふけている我々に警鐘となり、人間の基本を教えるためにやって来たという気がします。

その意味で、武君は中国からの研修生ではなく、“中国からの先生”と言えます。社員の



中にも武君を見習って自分をみつめ直す人も現れ、我が社に多くの教訓を残して去って行きました。

わずか一年五カ月の短い期間でしたが、多くの社員の心をつかみ、歓送会では涙を流して別れを惜しんだことが昨日のように思い出されます。

武保和君の形に現れない大きな財産を、我が社に広めて行くことが大切です。『中国からの先生』『出目金の武君』のご健闘とご多幸を心から祈念し、日中友好の礎とならんことを心から期待しています。



## 「差」と「違い」

テレビコマーシャルで『違いのわかる男』というのがありますが、考えてみると、これは非常に意味の深い言葉です。

よく「差」は追いつけるが、「違い」は簡単に追いつけないし、出来ないといわれます。「違い」は長い年月が必要であり、それもいたずらに年輪を重ねるだけではなく、コツコツと積み重ね、しかも常に、革新を続けた結果として違いとなつて現れてきます。この違いは、困難や試練に遭遇した時に一層鮮明に現れます。

例えば、ゴルフでも好天の初日あたりですと、アマの選手が意外に上位に入っている場合がありますが、決勝ラウンドで、プレッシャーがかかったり、悪天候の風や雨の日になると、やはりプロには勝てません。これはアマとプロの実力の違いです。「うどん屋」さんで、いつもたくさんのお客さんが入っている店がありますが、それは味が違い、サービスが違い、心が違うからです。しかしこの違いも、現状に満足すれば、差となつてしまいます。

能楽の古典『花伝書』に「初心忘るるべからず」というのがありますが、初心は常に正しく、美しく、活力があり、方向性も正しいのですが、年とともに色あせることがあります。違いというのは、初心を忘れずに積み重ね、それを長い年月をかけて革新し続けることだと思います。

我々も施工、営業、技術、安全、財務すべての部門で、ユーザーを大切にすると、「心」の違いがある会社を目指して、遙かなる道程を一步一步前進することが本質です。ともあれ、『違いのわかる男』であり、『違いを作る男』になりたいと思います。

## 動機と過程と結果

先日、神父さんが「動機」と「結果」について話されました。例えば、お母さんが買物に出かけ、小さな子供がお母さんを喜ばせるために掃除をしていましたが、誤って花瓶を割ってしまいました。お母さんはその結果だけを見て、ものすごく子供を叱りました。子供の善意とか動機とかは全く関係なく、もう子供は二度と掃除はしなくなるでしょう。

我々は、日常生活でも、会社でも、社会でも結果だけを重視して、動機とか過程は無視して「結果良ければすべてよし」「結果悪ければすべて悪し」ということをやっているのではないのでしょうか？

野球を例にとってみると、バントのサインを見落としてホームランを打った。結果だけをみれば良かったかもしれませんが、次の大事な試合で大きな失敗につながります。奉仕や親切もそれが売名行為であったり、自分のためにするのは問題です。

受注活動にしても、何も努力をせずに受注出来なかったことと、ベストを尽くして受注

出来なかつたことは、結果は同じでも過程が問題です。同じ無災害でも「何もなかつたこと」と、「何も無いようにしたこと」は違います。

ですから、動機や過程が大切であり、結果だけで判断をすると大きな誤ちをおかすことがあります。反省させられる話でした。

「人生は成功か失敗かではなくて、いかに生きたかという生きざまである」



## 無形の財産

経営資源として、「ヒト、モノ、カネ」とよくいわれますが、貸借対照表では「モノ、カネ」の動きについては分かりませんが、人については全く記載されていません。

先日、日本経済新聞に「見えざる資産」という題で、現在のバランスシートは十三、四世紀のベニスの商人にその源があり、それが現在に及んでいる。物や金中心の時代はともかく、経済のサービス化、ソフト化の時代には、必ずしも現状にマッチしていないということが書いてありました。

バランスシートではよい人材、商品開発力、技術力、信用、社会性、理念等は分かりませんが、しかし、実は企業にとってこの「無形の財産」の方が重要です。これは一朝一夕には出来ません。

最近、企業の力を計るのに技術開発力、人材、成長性、信用、社風、社会性等の総合力で評価する方向にあります。これも時代の一つの流れです。福沢諭吉先生の「一身二生」

という言葉がありますが、これは一つの身体で幕末と、明治維新という二つの時代を体験したということで、今まさに我々も大きな変化に直面しているわけです。変化の激しい時代、明日は今日の延長線ではないのです。我々の業界もまさにその正念場にさしかかっています。

生き残るための最良の方法は無形の財産を増やすことです。二十一世紀の経営は「哲学」と「思想」「理念」が必要といわれる由縁です。企業の永遠の生命は「無形の財産」にあると云えます。有形の財産がいくらあっても、無形の財産のない企業はいつかは行き詰まります。形のあるものは「栄枯盛衰」「生者必滅」いつかは亡びるのです。

我々は我々自身のためにも、次の世代のためにも、このことを深く考える必要があります。

## 漢字の深意

漢字はアルファベットと違い、それ自体で深い意味を持っています。

例えば「経営者」というのは「みち経を営む者」とあり、利益を出す者とは書いていません。経を営めば結果として利益は出ますが、目的はやはり経営をすることが本質です。

また「思」という字は「田んぼの心」とあり、これはお百姓さんが我が子のように田に心をかけて一生懸命育てることです。ですからこちらの「思い」は必ず相手に通ずるものですし、自分はこうありたいと思い、それに向かって努力することが必要です。

信用の「信」という字は「人が言う」ということで、自分が言うのではなく、やはり人が言うからこそ信用になるのです。PR時代、自己主張の時代ですが、考えさせられます。「儲」けるといふ字は信者とあり、まず信者やファンを作ることが大切で、それをやらないと決して儲かりません。

よく子供の頃、祖父や祖母から「念」には「念」を入れてと言われましたが、考えてみ



ると「今の心」であり、心をこめてベストを尽くせということ。念が残ると「残念」で、念が無いのが「無念」です。男の「一念」岩をも通すとか、「執念」の勝利とか言いますが、これはそのことだけに「心」を集中し達成したことだと思えます。

“無理が通れば道理がひっこむ”と言いますが、理のないことをしゃにむに通すと正しい道が引つ込むため、これは長くは続きません。それは理が無いからです。

さて今年是我が社の四十期という節目の年。「念」を入れて「思い」をこめて「経営」をし今期の終わりに「残念」、「無念」ということのない様に頑張ります。

## 自助努力

自助努力とは、人に頼らず独り立ちして努力することであり、天は自ら助くるものを助くということなのです。

変革の時代、試練の時代であればあるほど、自らの力で生き抜かねばなりません。自力が他力を呼ぶのであり、一生懸命努力する姿に他が声援を送ってくれ、自力がなければ他力は来ません。

NHK青年の主張全国大会で最優秀賞を、受賞した姚慧彬さんの話を聞いて、豊かさの中で我々が忘れていた人間の原点を知らされました。

我々の先輩は、「苦は楽の種、楽は苦の種」とか、「艱難汝を玉にす」とか、「若い時の苦労は買ってでもせよ」とよく言われましたが、我々は物質的な豊かさの中で、いつの間にか、「苦は悪、楽は善」という構図を描いてしまいました。その為、なるべく苦を避けて安易な方向に走るようになり、他力に依存する甘えの体質が身につけてしまった気がします。

言葉も習慣も風俗も違う日本の社会で、わずか四年足らずの間に姚さんが成し遂げた事績をみるにつけ、人間の限らない能力と自助努力の素晴らしさに驚歎し、反省もさせられました。先日、関光汽船の入谷社長が「ロケットが大気圏を破る時にものすごいエネルギーが必要であり、それを突破すればまた順調な飛行をすることが可能である。その壁に直面した時に、苦しさに負けて落ちてしまうのか？その壁を乗り越えることが出来るのか？それが問題である。だから苦は楽の種であり、楽は苦の種である」と言われました。

我々の業界も年々小さくなる工事量というパイをめぐって、大きな試練に直面していますが、この壁を越えて行かねばなりません。

姚慧彬さんも、東京で第二の人生へと巣立って行きましたが、初心を忘れず、一步一步着実に大きく羽ばたいてもらいたいと思います。

彼女が我々に残した「チャレンジする人生」、「努力する者は必ず報われる」ということを信じ、自助努力に努めます。

## 悪循環と善循環

世の中の大きな流れを見てみると、悪循環と善循環ということがあります。

人生、人間関係、教育、経済、スポーツ、仕事、趣味などあらゆる面で、この流れが大きく作用しています。

スポーツでみると、伝統があり、よく練習をして強くなり、強くなって勝つと、勝つ喜びを知り、それを維持する為にさらに精進し、優秀な人材が集まるという具合に良いローテーションになります。

しかし、悪い方に行くと逆の循環作用が起こります。一度悪循環に入ると、これを止めるのは大変エネルギーが必要であり、悪循環の方は早く結果が表われます。

悪循環軌道は簡単に乗れますが、善循環軌道に乗るにはかなりのエネルギーが要り、また油断や驕りなどが表われて時間がかかり、すぐには効果が表われません。

「強いから勝つのではなく、勝てば強くなる」というのは善循環作用であり、「弱いから

負けるのではなくて、負ければ弱くなる」というのは悪循環作用です。

今年の阪神タイガースは、勝ちながら段々強くなり、自信を持ってプレイをし、チームが一丸となってチャレンジする姿にファンが応援するという善循環が続いています。二十年ぶりの優勝も夢ではありません（?）

企業経営にもこの論理は当てはまります。

立派な企業というのは、社会に存在価値があり、社員のモラルや信用が高く、使命感がありお得意先を沢山持つていて、益々発展します。

家庭も企業も、そして社会も国家も、世界中が悪循環を絶って、善循環に向わねばなりません。人間は、その為に生きているとも言えます。

“自分が変われば世界が変わる”——悪戦苦闘しながらも、善循環軌道を求めて努力し続けたいと思います。

## 心眼

「心眼」とは物事を鋭く判断する心の動きと辞書に書いてありました。

人間は形にあらわれたり、眼に見えるものだけで判断し、価値を決めますが、実際には形に無い氷山の水面下の部分の方がもっと大切なのです。

心眼はその水面下の部分を見る眼と言えるかもしれません。それには心にこだわりがなく、虚心坦懐、素直な心、私心のない状態でないと正しく見えません。

自分の都合や利害の為に色眼鏡を掛けていると、大きな間違いを起こすこととなります。とかく自分の都合でとらえ勝ちですが反省しなければなりません。

当社のお得意様である、ある会社の先代社長が「商人の道」という話で、「相手の足元を見たり、相手の弱味につけ込む商売をするな。相手が困っている時は、むしろ安く売るのが商人の道であり、天道」である。一時的に利益があっても、長いサイクルで見ると、相手の立場に立って天道を行く者が必ず勝つ」と言われましたが、これは心眼でものを見る

眼を持つているから言えた言葉だと思えます。

世の中が混迷し、変化する時代だからこそ心眼で見ないと、自分自身が振りまわされ分  
からなくなります。

ある人が「結局、人生はどれだけ金にならない仕事をしているかが勝負である」と言われ  
ましたが、これと同じ言葉がPHPの八月号に「損の道こそ、徳の道、そして得の道」  
と書いてありました。深い味のある言葉だと思えます。

曇りがちな心眼を磨いて、苦難の時代を生き抜きます。



## 道

一つの山に登るのにもいろいろな道があるように、人生を生きて行くのに人それぞれの道を歩み続けています。

どの道を行くのも、それは自分自身が決め本人の自由な意志です。しかし、振り返ってみて悔いのない道を歩むことが大切だと思います。

正道と邪道（どちらが正しくて、どちらが間違っているかというのはそれぞれの価値観での問題で変わってきますが）の違いを一口で言うならば、正道を歩いて失敗しても悔いは残りませんが、邪道を選んで失敗した場合は悔いが残り、残念であり、大きな傷跡を残すことになります。

かつて九連覇の偉業を成し遂げた元巨人軍の川上監督の話で、今日練習を「休むか」「やるか」どちらが正しいのか分からない。しかし、明日の大切な試合に休んで負けたら悔いが残る。だから自分は多摩川でやる方を選んだ。ベストを尽くして、やれるだけのことを



やつて負ければ仕方ない——という話を聞いたことがあります。

まさにベストを尽くして天命を待つ心境だと思います。

今日、正道を歩んだので明日もこの道を行くとは限りません。毎日岐れ道がやつて来るのです。

特に利益のあることに直面した時に道を誤ることがあります。

孔子の言葉に、「その利益が道にかなっているか否か？をよく考えよ」というのがあります。

正しく道を選ぶということは大きなポイントです。今まで歩んだ道を振り返るとき、反省と後悔ばかり残る人生です。

これから先の道は、悔いのない、念の残らない有意義な道を歩きたいと思えます。

## タイミング

以前読んだ本の中に「啐啄そつたく」という言葉がありました。

これは、武田信玄が徳川家康に送った手紙の表書にあつた言葉で、禪から出たものです。

鶏が卵をかえす時、卵の中の雛が殻を破つて出ようとして内からつつくのが、「啐」といい、雌鶏が外からつつき破るのを「啄」といいます。これが両方から同時に行わねばならず、しかもその時機を間違つて早くつつくと水になり、遅ければ腐つてしまうというわけで、タイミングの妙を言い表わす言葉です。

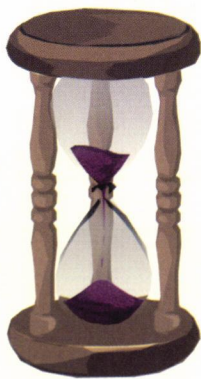
間を取る、間を保つタイミングというのは実に難しいものです。

例えば、昼食前の空腹時に訪問する営業マンは、相手がイライラするだけで、まとまる話もまとまらなくなりますし、ゴルフのショットも野球も柔道も全てタイミングです。一流の歌手や役者は間の取り方が実に上手で、それが自然と心に浸み込んでくる気がします。男女の恋愛もタイミングです。

これは経営にも通じます。「動いてはいけない時」「動かねばならない時」、この判断を誤ると命取りになることがあり、勝負どころというのは必ず来るもので、この間の取り方が違くと間違いとなります。

早くとも遅くともいけないわけで、軽率な行動が取り返しのつかない失敗となり、又対応が遅れて間が抜けてしまうことや手遅れになることもおこります。

人生全てタイミングですから「人間」というのかもしれない。



## 明日は明るく

「明日という字は明るい日と書くの」という歌詞があります。

プラス思考——「もう」ではなく「まだ」という見方をすると、事態は全く違つて来ます。もう六十歳と、まだ六十歳では全然違います。二社に一社が赤字と、二社に一社が黒字では心構えが変わつてきます。毎日の業務もいやいやするのと、自分の将来に必ず役立つと思ひ、進んでするので結果は大きな違いとなります。

経済界も円高デフレ。構造変化などの大転換の時を迎えましたが、我々中小企業は必ずしも不利な面だけでなく、有利な点もたくさんあります。丁度、氷河期にマンモスが滅び、小さなりすやねずみの様な動物が生き残つたように、変化に対応するのは中小企業ほど順応性があります。

我々は構造転換、不況を嘆くばかりではなく、大企業には出来ない強い点を生かすことを考えねばなりません。

変化に対応するスピード、ユーザーとの人間関係、社員が共有する価値観、一体感、意志疎通など、むしろ中小企業だからこそその利点を見落しています。

長所を短所と違って、自から劣等感に悩み、迷路に入りこんで行くことがあります。

プラス思考で明るく、現在は次に来る新時代への陣痛の苦しみであり、飛躍のための修業の場と思って、自信をもって自らの力で生き抜くことが大切です。

特にリーダーには明るく、陽気な人が求められるのも時代の要求だといえます。

高杉晋作が「面白くない世の中を面白く生きるのは自分の心である」と言っています。「明日は明るく」を信じ、チャレンジします。

## 自分の価値は他人が決める

私はもう三十年以上も前から熱烈なタイガースのファンで、タイガースが勝った日は一日が楽しく感じられます。

六月七日広島カープの衣笠選手が二千試合連続出場という大記録を樹立しました。足かけ十七年間かかったとのことで、考えてみると、小学校へ入学した子供が中学校、高校、四年制大学を卒業するまで十六年間ですから改めて驚かされます。

その間、まず競争の激しいプロ野球の世界でレギュラーの定位置を守るだけでも大変な努力が必要です。次に病気や怪我との戦いがあり、衣笠選手はボールに向って行くため、史上二番目という百五十六個の死球を受けています。

改めてその記録の偉大さを感じます。これは一つ一つの努力の積み重ねであり、自分との戦いであり、まさに努力と気力の歴史です。

その記録達成の場所が甲子園球場であったのもなにかの因縁で、四万五千の大観衆が惜

しみない拍手を送りました。真善美—人間は正しいもの、美しいものには、敵であれ味方であれ、素直に祝福出来るということですよ。トラ狂の私も心から祝福したことはいうまでもありません。

「敵ながらあっぱれ」と言われるような人間になりたいものです。

やたら自己PRの時代に「自分の価値は他人が決める」。それを地で行く光景でした。衣笠選手と甲子園のタイガースファンの素晴らしい心の交流に感動した楽しい夜でした。



## 対岸の火車 他山の石

「対岸の火車」とは、自分にとって少しの痛みも感じない物事のたとえです。「他山の石」とは、よその山から出た悪い石でも、宝石の玉をみがくその砥石に使うことができるということで、自分の修養の役に立てることや、人を以て鑑とする、人の振りみて我が振り直せ、という意味です。

そういうことで自分自身を反省してみると、人生の中で意外と「対岸の火車」という発想で生きていることに気づきます。

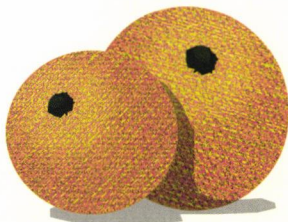
よく、野球でもゴルフでも勝った試合より負けた試合の中に教材があるといわれます。交通事故でも、労働災害でも、自分に関係がないと思つて見過ごす人と、自分のこととして受けとめ、次に生かす人とは大きな違いとなります。

ある先輩が「人生の中で順境よりも逆境の中に学ぶことが多かった」と言われましたが、大転換の試練の今こそ成長する時かもしれません。



いろいろな社会の出来事や自分のまわりの現象も「他山の石」「明日は我が身」と常に自分のこととして反省し、対処する人は豊かな人生を送ることができると思います。

先日、ダイヤモンド誌上に「いいことはおかげさま、わるいことは身から出たさび」という言葉がありました。いいことは「自分の力」とのぼせるし、わるいことがあれば「あいつのせいだ」と他人を恨んだりしてイライラすることが多いものです。「対岸の火事」「他山の石」に通ずるものがあり反省させられました。



## 四ツの気で挑戦

新年のある雑誌に、「本年の経済界は、我々がかつて体験したことのないような環境に直面すると思われる。それにどう対応すればいいのか、答えは誰も知らない。それぞれの企業が、人間が、新しい時代への道を、自らの力で切り拓き答えをさがさなければならぬ」と書いてありました。

世の中が予想もしない変革の時代には、「成功は失敗のもと」ということにもなります。一度成功すると、次もそれを続けます。武田の無敵騎馬軍団も、連戦連勝成功し続けたことが、長篠の大失敗につながりました。「諸行無常」とはよく言ったものです。

企業経営にも同じことが言えます。かつての花形産業の衰退、現在の成長企業も成功にあぐらをかいていると、次の失敗につながります。常に革新を続けることなしに企業の存在はありません。

その原点は「ユーザーのために我が社がある」ということで、その逆ではないのです。

そこでこの激動の年に対応する在り方として「正道を行く」と「心眼でみる」という二つのことを念頭においていきたいと思えます。

国道が混んでいる時、つい脇道に入りたいたいものですが、それが迷路にまよいこみ、結果としてまわり道をしたこととなります。

また、肉眼でみると現在のことだけしか見えず、めまぐるしく動く現象に振りまわされて、自分を見失うこととなります。

理想と現実、未来と現在、将来と足もとをじっくり見つめて、元氣と勇氣と根氣の三つの氣に今年は吞氣を加えて、ゆとりをもってチャレンジします。

## 至言・コック長

先年、研修生として中国から来た武保和君が在社中のある昼休みに「中曽根さんがなぜコック長ですか？」と聞いてきました。

突然のことで理解に苦しみました。武君が新聞で中曽根宰相論を読んで、なぜ中曽根さんがコック長と疑問に思ったようです。

中国語で「宰相さいしやう」というのはコック長（チーフコック）のことだそうです。

考えてみると、「宰相」というのは、国民が生活出来るようにするのが目的であり、国民が安心して食事を得られることが最大の任務であるので、総理のことを「宰相」というのかもしれません。

この論法を会社に当てはめると、社長や役員は企業を永遠に存続して行くことが任務であり、その面では小さいながらもわれわれは「宰相」でなければなりません。

ところで、わが国の終身雇用制度や年功序列賃金制度が持続できたのは次の三つの前程

条件があったからだといわれます。

一、豊富な若い人材を雇用できること。

一、大量な新規採用者を次々昇進させるだけ企業が伸びること。

一、技能の伸びが年功に比例する程度のレベルであること。

しかし、今日は第二の産業革命といわれる大転換の時代、現実はどうもあてはまらない状態です。

田高、貿易摩擦、雇用問題等々の中でも「宰相」はその任務を果たさなければなりません。「我今何をなすべきか?」「我今いかにあるべきか?」考えをめぐらす毎日です。

## 変革の時代こそ 発展のチャンス

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」有名な「平家物語」の一節です。

諸行無常とは世の万物はすべて変化を繰り返しており、同じ状態がいつまでもつづくものではないということであり、“万物流転”という意味です。

最近の情況は政治、経済、文化、宗教、あらゆる面で大きく変わりつつあります。例えば貿易を例にとっても、以前は輸入した原材料を、加工して製品としていたのが、今や輸入総額に占める製品の割合は、四十%を超えるということです。また試験的とはいえ、アメリカのUSXが円高を背景にして我が国に鋼材を輸出するということで、まさにさまざま変わりの昨今です。

我々の業界も構造転換、体質改善という大きな試練に直面しています。

戦後の焼土から高度成長を経て多少の紆余曲折はあったとしても、恵まれた四十年間であったと思います。

しかし、恵まれた日々はもはや過ぎ去り、これからは茨の道が続きます。第二の創業の時代を迎えたといえるでしょう。今こそ創業の原点に帰り、全社員が心をひとつにして対応せねばなりません。どんな時代が訪れても、希望をもって未来を信じ未来に生きることが大切です。

「変革は発展のチャンスである」



## 一九、七二三日

これは先日、私が五十四歳の誕生日に、ある生命保険会社からいただいたバイオリズムの診断の中にあつた数字です。長いようでもあり、また短いようでもあります。私がこの世に生を受けて、現在まで過ぎ去つた日数です。

人間は生まれた時から蠟燭の火を燃やすように、毎日毎日大切な命を燃やしています。しかもその灯はあと何日燃えるという保証はないのです。十年後に消えるのか、二十年後に消えるのか、明日であるかもしれませぬ。

そう思うと、無駄に浪費したことをつくづく反省させられます。しかし、過ぎ去つた日々は、もとにはもどりません。残りの人生は三、〇〇〇日か五、〇〇〇日か、あるいはもっと短かいのか、それは分かりませんが、これからは一日、一日を大切にしたいと思います。

そこでこれからは、変化を避けるのではなく、変化を求めて行く人生が大切だと思っています。自己変革能力を向上させねばなりません。過去ではなくて未来に目を向けること



です。

次に青年のように感動を求め続ける人生です。八十歳を過ぎてもなお新しいものを求め、子供のように感動する方がいますが、いくつになっても感動する人生を送られることは幸福ですし、若さの原点です。

第三に人と人とのふれあいを求める人生です。多くの方に接することによって世間を広く生きることができずし、自分も成長を続けることができます。



## 心の健康を

先月行われた全国労働衛生週間のスローガンは「ととのえよう職場の環境、進めよう、心とからだの健康づくり」でした。

今日、心の健康づくりが重視されていますが、心の健康に作用するプラス・マイナスのファクターは何か考えてみました。

まず、マイナス面は、必要以上の欲望があります。権力欲、名誉欲、物欲、嫉妬、妬み、悪口、自己中心、傲慢、いらいら、陰気、不安、不信、争い、親不孝、こだわり、否定的、無感動、そしり等々は心の健康にはマイナスの部門です。

他方、プラスの方は、感謝、謙虚、協力、陽気、希望、感動、信頼、情熱、憧れ、親孝行、ゆとり、悟り等々はプラスの部分です。

人間、煩惱の悲しさ、マイナスの方に多く片寄っているようです。

今日、ストレスや挫折などに心に起因する病気が「現代病」と言われ、往年の肺結核に劣ら

ない危険な国民病と警告されています。

「健全なる精神は、健全なる身体に宿る」といわれますが、逆に健全なる身体は健全なる精神がなければ成り立たないとも現代精神医学は教えています。

結局は自分自身の気持ちのもち方で、心も身体も豊かにも貧しくもなります。

難しい時代ですが、“心の健康”は人間の原点であり、心身ともに健康で充実した人生を送りたいものです。そこに初めて自己完成の意欲も湧くわけで、労働衛生週間を単なる年中行事に終わらせてはならないことを改めて痛感します。

## 守節

守節―節度を守る、ケジメをつけるという意味の守節はいろいろなことにあてはまりません。

約束を守る、法を守る、ルールを守るということもケジメです。

男性の女性化とか、女性の男性化といわれる時代ですが、やはり男は男らしく、女は女らしくというのが必要で、自ら節度があります。

公私の混同、権限の乱用は守節を忘れた結果であり、権利と義務は守節そのものです。

「親しき仲にも礼儀あり」に似た格言で、ドイツには「汝の隣人を愛せよ、されど垣根を取り除くなかれ」という言葉があり、やはり守節です。

先日、ある先輩が、人生には許してもいい失敗と、許してはいけない失敗があると言われましたが、考えさせられました。

世の中が平和な順境の時に、最も注意せねばならぬのは驕りおごりであり油断です。知らず知

らずのうち、身に付いた驕りや油断が、やがて企業を、社会を、国家を滅ぼす基になります。

逆境の時や乱世には、目先の利を追い、大所・高所からの判断を誤りがちです。最も大切なことは「志」であり、人生観です。人生をいかに生きるかという哲学でもあります。

「なり振りがまわらず」という言葉がありますが、やはりなり振りはかまって、節度は守らねばなりません。

大変革の年、「守節」を念頭にチャレンジします。

## バランス

「ヨガ」という言葉はバランスを保つという意味だそうです。

大自然の営みで、恵みの雨も降りすぎると大洪水となり、水害となりますし、生命の基である太陽の光も日照が続くと生物は存在できません。樹木を切りすぎると砂漠となり自然を破壊してしまいます。やはりそこには調和が必要であり、何事も過ぎたるはおよばざるがごとしと、バランスの大切さを教えています。

教育は「智・情・意」がバランスよく成長することが大切ですが、偏差値一辺倒、智だけを優先する教育になっています。横綱の条件「心・技・体」も再確認が指摘されています。

経済の面でも同じことが言えます。ある国の大きな黒字と、他の国の大きな赤字という状態は、理由はともあれ経済の面では、うまく回転しません。首都圏に富や人口が集中し、地方が衰退することは国家として考えると、決して好ましいことはありません。

企業でも営業力、生産力、管理力、財務力、開発力などがバランスよく保たれないと永遠に存続することは出来ません。技術力がいかに優れていても営業力が弱ければ、宝のもちぐされですし、いかに営業力が強くても、品質や技術がともなわないと敗れます。

物とか金だけを追求すると、心のない自己中心の人間になります。

最近ある雑誌に、アジア諸国では「日本製品は大好きだけど、日本人は大嫌いだ」と言われているという記事がありました。反省させられます。

全ての面でバランスが崩れると摩擦が生じ、問題が起ります。一人ひとりが物と心のバランスを保つことが、良い社会を、世界に存在価値のある日本を創造することになります。

## イエスの 可と否の土壤

「同じ種を蒔いても、良く耕された良い土壤では、芽を出し、やがて立派な実を結びますが、石ころだらけの手入れされていない土では、芽が出たとしても実にはなりません（神父さんの言葉）」これは人間社会の営みでも企業経営にもよくあてはまります。

同じ注意を受けても素直に聞き入れられる人と、無性に腹の立つ人といいます。

“イエスの土壤の人”からの注意はすぐに受け入れられますが、“ゾーの土壤の人”の注意には反発するものです。それは信頼関係があるかないかで決まると思います。

自分の尊敬する人（イエスの土壤の人）を頭に描いてみると、共通している点がたくさんあります。

- 一、人生を生きるための目的、哲学を持っている人
- 一、人生をひたむきに生きている人
- 一、相手の立場にたって考えられる人



一、私利私欲（名譽欲・権力欲・金錢欲）が少ない人

一、謙虚で感謝の気持ちのある人

一、おもねることも卑屈にもならない人

一、感動する心を持ち、常に若さを感じる人

一、誠意と節度があり、陽気な人

一、先見性と決断力があり、小事にこだわらない人

一、勇気と気迫があり、率先垂範、行動力のある人

一、他人の痛みが解り、思いやりのある人

国際化時代の世界で、本当に我が国と信頼関係で結ばれている国が、どれだけあるのか、国としても信頼されねばなりません。

人と人、企業と企業、国家と国家、お互いに信頼される「イエスの土壤」を創ることが人間社会のキーだと思います。

## 創るのは数、求めるのは一人

先日、NHKのラジオで「伝えたい言葉」というのがありました。その中で、仏像を造る方が「仏像を数多く造っていると、つい油断があつたりおろそかになつたりすることがある。しかし、それを求める人は常に一人であるので、一つ一つに念を入れ、心をこめて立派な彫刻をせねばならない——これは、父に注意された言葉だが、自分も次の代に伝えて行きたい」ということでした。

我が社の仕事にもこれがあてはまります。大きな仕事ですと、注意深く取り組みますが、小さな仕事にはつい油断や驕りが生じ易いのは凡人の常です。しかし、ユーザーにとっては一生涯の仕事です。ですから常に全力で念を入れ、思いをこめて、ベストを尽くさねばなりません。

災害の発生も同じことが言えます。危険な作業は常に緊張して対処し、念を入れて取り組むので、案外と災害は発生しませんが、こんな作業と安易に考えたり仕事に追われると、

落とし穴があります。

反省という言葉は、うまくいかなかった時のイメージですが、本当は順調な時多忙な時に反省し、油断や驕りを生じない様に次のことを考えて行くのが大切だと思います。

徳川家康が「勝つことばかり知りて負けることを知らざれば害その身におよぶ」と言い秀吉が「六、七分の勝ちで十分となす」と言ったのもこの油断や驕りをいましめるためだと思います。

「創るのは数、求めるのは一人」この言葉を経営に生かして行かねばと思います。

## 意中有人

一、死中有活

二、苦中有樂

三、忙中有閑

四、壺中有天

五、腹中有書

六、意中有人

この六つを「六中観」といい、人生を生きて行く指標のようなものですが、この中で「意中有人」というのは、いつも心に私淑できる人物をもっていること。自分が人生に迷った時に相談し得る師をもつことだそうです。

人生はリハーサルのないブツツケ本番のドラマです。いろいろな障害や挫折はつきものです。その時に意中の人の「あの一言」で耐えられたとか、乗り切れたとか、パツと道が開かれたという話はよく聞きます。

ですから「意中の人」をたくさん持っている人は、人生を巾広く、大きく生きて行けることになります。

自分自身を振り返ってみて、この半年間の間にたくさん「意中の人」を失ったことに

気付きます。

いつも顔を見ると、「子供には贅沢をさせるなよ」と、教育の真髓を教えてくれた松浦先生（国立小倉病院の名誉院長）。諸行無常、常に変わり行く世の中で現状に満足せず、次の時代の「柱」を模索しなさいと経営の基本を示したカネヤスの岡本元社長。人の出会いを大切にし、リーダーとはかくあるべきと、身をもって実践した鎮西女子学園の藤井校長。兄のように公私にわたって相談にのってくれた秋穂木材の大森社長。

師や父や兄の様な偉大な「意中の人」ばかりです。

人はそれぞれ、色々な形で「意中の人」をもって生きていることを感じます。

先人の生きざまを学び、実践してゆかねばと思い、それが自分の使命であると反省する秋の夜長です。

## 物心ともに豊かな「平成」へ

年号が「平成」と変わりました。

国の内外、世界が平和に成るといふ願いをこめて、これからの時代にふさわしい年号だと思いません。

また「平」は平等の意味で、世界的な流れでもあります。米・ソ超大国を中心とした枠組が変わり、E C・アジア・アフリカ・中近東などのブロック単位の構築も、横社会への流れをあらわしていると思います。

ふり返ると、「昭和」の時代は「治・乱・興」とまさに激動の時代でした。

戦後はゼロからのスタートで、物さえあれば、金さえあれば人間は幸福になれるという考え方、それはそれなりに正しかったと思います。

今、四十数年間を経て、人間の幸福はそれだけではないことに気付きはじめています。

ここで物事を根本から考え直す時であり、人間の原点に戻って、人生とは？幸福とは？平

和とは？国民のコンセンサスをつくるのが大切です。これも横社会の原理です。

豊かな社会や国家とは、物と心の豊かさであり、物質だけではありません。豊かではあっても、理想をもたない国家、心の無い社会はやがて没落して行きます。

今年は何年であり、蛇は殻を破って脱皮せねば生きて行けません。

脱皮には摩擦が伴い、陣痛の苦しみがありますが、それを超えて行かねば新しい時代を開くことは出来ないと思います。

「平成」が物心両面で豊かな時代であることを念じています。



## 着眼大局

「針の穴から天をのぞく」という言葉があります。

針の小さな穴から空をみても、一点だけは見えますが全体は見えません。一点をのぞいて全体を判断すると誤ります。大所、高所から観察し、大局を正しく把握しなさいということです。

最近の世の中の移り変わりはまさに激変。人類六千年の歴史のなかで、かつて体験したことのないスピードで変わりつつあります。

例えば、国際化は人・物・金から情報・文化まで、世界の各地から入ってきています。今まで価値のあった自社製品が、ある日突然存在価値を失うこともあります。

昭和三十九年の東京オリンピック開催の年、我が国のGNPは三十兆円だったのが、昨年は三百七十兆円。当時は想像も出来なかった大きな数字になっています。三十兆円が十%成長すると三兆円ですが、三百七十兆円が半分の五%の成長でも十八兆五千億円という膨



大な数字になります。今や我が国の経済は我々が、意識するとしなやかにかかわらず、世界に大きな影響を与える結果になっています。

文化の面でも大きな変化が起っています。先月の日曜日、古代の夢とロマンを秘めた佐賀県の吉野ヶ里遺跡に四万五千人の人が集まったとのこと。多くの設備費や広告宣伝費を使って行うイベントも顔負けのかたちです。

こうした想像を超える変化の時代には、従来の潜在意識や既成概念、固定観念が邪魔をすることになりかねません。

「針の穴から天をのぞく」というのでは、政治も経済も文化も企業経営も大きな誤りを犯すことになります。

固い頭を柔らかくして時代の変化に取り残されないようにと考えるこの頃です。

## コントロール

人間は、実に多くの欲望をもっています。生存欲から名誉欲、権力欲、金銭欲などまで。欲望があるから人間ですし、ある面では人生の励みになっていることも事実です。

欲望は抑えるな、しかし、コントロールせよ、という言葉もあります。

動物は、満腹状態の時は、決して目の前に小動物があらわれても殺生はしないといます。それをやると、自分もやがて滅びて行くことを、自然の摂理として知っているのです。

あくなき欲望というのは、人間の社会だけかもしれません。

ある人が、外国にはアンデルセン、グリーム、イソップなどの夢のある童話が沢山あるが、日本では欲張り爺さん、欲張り婆さんや仇討の話が多い、と言っていました。それは、本来、日本人が欲張りだから、それをコントロールするためにあるのだと言い「佗」「寂」「無」という思想が必要だったと言います。現在は抑止力が無くなり、欲望だけが前面に出ている状態だと分析するのです。

アメリカで、日本の経済力がソ連の軍事力よりも脅威であると言う人の方が多いと、テレビでやっていましたが、精神的な欲求を満たすことが真の意味で幸福につながります。

ですから、物質的欲望をコントロールする手段を持つことが大切です。それは、人それぞれ違います。宗教、哲学、人生観、理性、尊敬する師と、さまざまだと思います。親子三人で、一杯の「かけそば」をすすめる家族の話をお忘れてはいけません。

ある会社の社長が、「志は高く、生活は質素に、常に謙虚に、感謝の人生を送りたい」と言われましたが、考えさせられる言葉です。

## 社 徳

ある雑誌に「社徳」という言葉が書いてありました。

人徳という言葉から考えると、会社に備わっている徳という意味だと思っています。

正法眼蔵随聞記の中に「密々に徳を修して飽けるをまつ」という文がありますが、徳というのは人知れず陰徳を積み、人が知ってくれるかどうかというのは、関係のないことである、ということですが、まさに「社徳」もそうでなければと思います。

「会社」というのは、ひっくり返すと「社会」ということであり、社会に貢献出来ない会社は存在出来ない、ということですが、会社が存在するためには「社徳」を積むことが必要です。

最近、経営上一番の問題点として人手不足があります。昨年は明治三十二年に統計をとりにだして最低の出生率だったそうですが、若者の就職条件にもこの「社徳」や企業イメージが問われることになります。

人集めのための初任給アップなど、見せかけの小細工や倫理にもとる事業拡大では永続

きしません。

あらゆる業種で企業間の格差が開く傾向にありますが、その原点には案外この「社徳」が係りあっている気がします。

企業の隆盛も「社徳」がなければ長くは続きませんし、一見、豪華にみえても、それは幻のごときものです。

会社というのは、社員一人ひとりの集合体ですので「社徳」というのは、全社員の人徳の積み重ねの結果として「社徳」という形であらわれるものです。

ともあれ、社会に存在出来る企業をめざして「社徳」を積んでいかねばなりません。

## 応変力

平成という新時代を迎えてこの一年、めまぐるしく変わる変化の幕明けとなりました。国の内外を問わず、政治、経済、文化と、大きく激動しています。

この時代の経営には、変化に対応する力、つまり「応変力」というのが、大切な要素になっています。

「大変な時代」というのは大きく変わることです。

「変」というのは、なにか悪い、というイメージでとらえますが、地位が一段とあがることも「変」です。ですから変化に対応するため日々力をつけておくことが大切です。

よく、御祝いの席に「海老」が添えられますが、それは殻を破って脱皮し、成長しなさいということだそうです。殻を破らなければ、やがて滅してしまいます。

人も年齢とともに変貌しなければなりませんし、企業も常に時代とともに変革しなければ生き残れません。

創業社長である会長の旅立ちは、我が社にとって大きな「変」であり、区切りであり、確実にある時代が過ぎ去ったのです。

これからは第二の創業のスタートと認識し、次の時代に対応して行かなければなりません。

二十一世紀を目指してユーザーのために我が社があるという姿勢を貫くことによつて我が社は存在することが出来るし、そのことは、全社員の物心両面の豊かな未来につながります。技術、営業、財務、総務、安全と、あらゆる部門のレベルアップと、公正で自主性、創造性を基本とし、全員の英知を結集して、活力ある我が社の創造へチャレンジします。

「極まれば変ず、変じざれば滅す」

## 問われる豊かさ

経済大国といわれ、経済中心、物質中心で戦後一貫して豊かさを追求してきた我々が気が付いてみると、その代償のあまりの大きさに愕然とします。

ある雑誌に「崩れ行く家族」というテーマで現在の親子のことが書いてありました。その中で、子供達の川柳に、母親に対しては、「タレントじゃないのに化粧母濃すぎ」とか「考える暇なし僕は次々とママの言葉に踊らされて」。

また父親に対しては、「断絶というほど、われら父と子は幼いころから繋がってはず」「人並みに叱られてみたいときもある、俺のおやじは俺が恐いか」と明治の父母が聞いたら腰を抜かすものばかりで、そこには親子の信頼、尊敬、愛情というものは全く感じられません。

「繁栄は人間の心にとって不運以上に厳しい試練である、人間は不幸には堪えられるが幸福には腐らされる」という言葉があります。

初心を忘れ、あるいは、はつきりした目標を持たないことによつて、気が付いたらとん



でもない方向に進んでいることがあります。

先だつてNHKで三夜連続の「地球は救えるか？」というテーマで酸性雨、温暖化、砂漠化、二酸化炭素の問題を取り上げていました。経済性だけを追求する事によつて地球を破滅の方向に動かしているようです。

「近代物質文明」に対する考え方が問われ、区切りをつける時代が来たように思います。経済中心の思考、物質中心の考え方から人間の原点にかえつて、物心両面のバランスのとれた真の豊かさを追求するときだと思えます。

## 壁を破る

人が生きて行く上でも、企業の経営でも、政治、経済、宗教、文化などあらゆる面で壁に直面することがあります。ロケットが大気圏に突入するとき、それを破るため大きなエネルギーが必要なように、厚い壁はそれを抜けると自ら道が開けます。

我が社でも過去を振り返ると数々の壁に直面していますが、その度に全員の力で乗り切つて来ました。

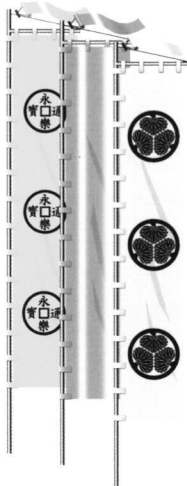
完成高で十億の壁を破ったのが昭和四十一年で、さらに大きな五十億の壁は昭和五十六年に達成しました。会社だけでなく、人も壁に当たり、それを越えるか？落ちて行くか？そういう局面に何回となく遭遇します。その意味では人生は壁との戦いといえるかもしれません。

信長の桶狭間の戦いや、秀吉の天王山、家康の関ヶ原のように、人間、“一生”を “歴史”を左右する大きな試練は必ずやって来るものです。

我が社も第二の創業を迎え、大きな壁と対峙しています。今、最も大切なことは、それを避けるか？挑戦するか？ということです。ヤル気があればどんな方法でも、やり方でも道は開けます。従来の考え方、行動ではそれを破ることは出来ませんが、試練や困難は変革のチャンスでもあります。

今期は創立四十五年という節目の年であり、百億の壁、大型工事の受注、ゼロ災害の実現等創立の原点のあのエネルギーを再現する時です。

「困難や試練が大きければ大きいほど、達成された時の喜びは倍加する」



## 交わり

井上靖さんの「孔子」がベストセラーになったり、論語ブームの最近ですが、春秋時代といわれる乱世の時代が大転換の不安な現代とどこかが相い通ずるのかもしれませんが。

論語によると、友との交わりは「益友」と「損友」という二つの「交友」があるそうで、「益友」とは

- 一、つきあって正直な人
- 一、つきあって誠実な人
- 一、つきあって博識な人

と、いわれます。正しくて嘘をつかず真心のある人、いろいろと指導してくれる人は、本当につきあって楽しく心に残り、また再会したいという気になり、まさに意中の人となります。

利害だけのつき合いは、いかにも淋しく無味なものです。

これを企業同志のおつきあいと考えてみるとやはり同じことがいえます。

一、つきあつて正直な会社

(正しく約束を守る)

一、つきあつて誠実な会社

(真、心のある)

一、つきあつて博識な会社

(ユーザーのためになる)

というのは「水魚の交わり」のごとくお互いに相手に役立ち、強い信頼関係で結ばれて長く続きます。

不透明な不安な時代こそ原理原則が大切です。国際間の交わり、企業と企業のおつき合  
い、人と人、いろいろな交わりの中で、やはりこの三つは基本です。

人生も川の流れのようにある時は早く、ある時はゆるやかに、ある時は激しく、ある時  
は細々と常に変わり流れますが、「水魚の交わり」でいたいものです。

「得意淡然」「失意泰然」

## 試練をバネに

先日、ある勉強会で人は「こうだから、こうなった」と言うが、「こうだから、こうなれた」という考え方が大切だと説かれました。

考えてみると、我々はうまくいかないことをいろいろと理由づけしますが、試練をバネにする考えの方がより人生を前向きに積極的に生きられます。

例えば、不況だからこうなったと言っているのは、やがて滅んで行きますが、逆に不況だからこそ革新し、不況に強くなる企業もあります。考え方によっては順調に物事が運ぶのはむしろ危険なことであり、苦労や試練が「魂への呼びかけ」であると言われる所以です。

人は苦や試練に直面し、それを乗り切ることによって成長するのです。まさにその意味では試練や痛みは「魂への呼びかけ」であります。

我々は試練や苦痛を避けて安易な道を選びますが、志すべきはむしろ逆です。

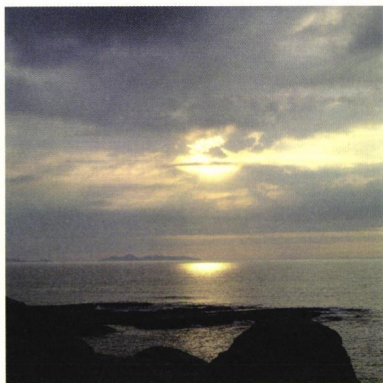
山中鹿之助は「我に、七難八苦を与えたまえ」と祈ったと言います。「艱難汝を玉にす」と

か「若いうちの苦勞は買つてもせよ」というのは人生を生きるための真理です。

大きな変化の流れの時代こそ、まさに試練をバネとして再生するチャンスです。

我が社も四十五年の歴史を振り返り、第二の創業として試練をバネにして変化に対応せねば存在出来なくなります。

いつ、どこで、何が起るか分からない不安定な世の中です。試練や苦は避けるべきものではなく、「魂への呼びかけ」であると認識し、積極的にチャレンジするのが本質です。



## 時代の風

諸行無常、常に時代は移り変わり行くものですが、人間には変わりたくないという保守的な面もあります。

しかしこの世は変わり行くのが当然だという考え方が必要です。

たしかに、目には見えないけれども、時代の風というのはあります。昨年の天安門の事件が、ベルリンの壁の崩壊と無関係ではない様な気がします。

明治維新も同じようなことを考える人達が、遠く離れた場所から現われ、薩摩、長州、土佐という連合体を作りましたが、これも時代の風といえます。

最近、世界中から自然環境の問題がクローズアップされ、「健康な地球」をとりもどす必要が叫ばれています。これも時代の流れであり、風です。

大阪の花博が二千三百万人の人をひきつけたのも、自然に対する人間の本能のあらわれの様な気がします。



このまま進めば、二十一世紀は地球の滅亡へと、つながりかねない破壊の道を進みます。物と金を中心とした経済最優先の企業経営、政治、教育、医療、農業、科学、文化から、人間を中心とした企業、政治、教育、医療、農業、科学、文化へと再生せねばなりません。二十世紀が経済中心の自我とエゴの時代であるならば、二十一世紀は「いのちの再生」の世紀へと転換せねばならないと信じます。

「平均寿命四十一歳」という本が出版されるのもまさに警鐘です。

この世の中、何が最も大切なのでしょうか。大切なものを大切に育てる勇氣と根氣、努力が求められています。

この転換は大きな苦痛と困難と試練をとまいませんが、人類の幸福のために避けて通れない厳しい道程だと思えます。

ゆつくりと、しかし確実に時代の風は今日も吹いています。

## 全・長・根

昨年末、ある先輩が、人生を歩む中で「全・長・根」で生きて行くことが大切であるといわれました。特に激動する変化の激しい時代はそうでないかと判断を誤ると、ご指導いただきました。

「全・長・根」とは、部分で観るのではなくて全体で、現在だけでなく長い期間で、枝葉のことだけでなく根本から観察して判断をするということです。

便利な鉛筆削りのために、大人になっても果物もむけない様になったり、ファスナーのためにボタンを掛けられなくなり、指先が退化するなど、本来持っている人間の機能も失ってしまうことがあります。

経営でも同じことがいえると思います。

安易な多角化が本業を駄目にして、その企業の人材や技術や大切な財産を失うことになります。

我々は何かを選ぶとき、プラスかマイナスか？苦か楽か？損か得か？便利か不便か？で選んできましたが、視点を変えるとそれが良かったかどうか、考えさせられます。

豊かな物質文明は先祖が大切にしてきた地球の財産を食い潰し、子孫に病める地球を残すことになります。

やはり「全・長・根」で考える必要があります。

「次に来る旅人のために泉を清く保て」という言葉がありますが、次の世代に対する思いやりが大切です。

「全・長・根」で二十一世紀のために今、一人ひとりがいかにあるべきか？何をすべきか？を認識し、小さなことでも実践することが本質だと思います。

## 親の魂

先日、高校時代の恩師が他界されました。

教育界一筋に、天寿を全うしての素晴らしい人生を送られ、永久の旅立ちをされました。なにか心の支えを失った空しさや虚無感におそわれ、ちようど父を失った時の様な気持ちになりました。M先生にはまさに親の魂で我々に接して頂いたからです。

休み時間を告げるベルが鳴っても、区切りがつくまで続けた授業も我々に対する深い愛情であったこと、出来のいい子より、出来の悪い私のような者に思いをかけていただいたのも、すべて「親の魂」であったと思います。

先生は、「優秀な子は放っておいてもいいが、君の様な者こそ教育が必要だ」と言つてよく叱られ、当時は最も憎まれた先生ですが、今では父親の愛を感じます。

迎合社会、甘えの構造の中で、物分りのいい父親や先生が増えて、真の意味での愛——「親の魂」を持った人間が少なくなってきたのかもしれない。

学生時代、隠れて煙草を吸っていると、見ず知らずの大人から注意され、叱られたのも「親の魂」の持ち主だったことが分かります。

都合の悪いことに目をつぶらず、勇気をもって行動することが必要です。傍観者や批評者や評論家になって、「今の若い者は」と言っても、社会は少しも変わりません。憎まれても嫌われても、それが親の魂を持った対話者であれば、いつかわかる時がやって来ます。

「親の魂」は決して、諦めないし、見捨てない、高次元の自我を持っています。

M先生の旅立ちを通じて忘れていた「親の魂」ということを考えさせられました。

## 自然を感じる

あわただしく生きる現代社会の毎日は、ともすれば自分を見失いがちになります。

そんな中で、先日参加させて頂いた八ヶ岳麓、まさに自然の懐での二泊三日の研修会で忘れていた自然を思い出し、自然の偉大さを再認識させられました。

透き通った青い空、小川のせせらぎ、甘い空気、柔らかい水、夜空に瞬く星、土と木で出来たロッジ、木の香り：子供の頃接した自然と再会することが出来ました。

林の中で瞑想し森林浴をしましたが、落葉によって育てられた柔かさはまるで絨毯の様ですし、鳥の声と小川のせせらぎを聞きながら静かな時を過ごすのですが、それが一時間あまり、全く時の経過を感じません。

本来、人間は自然を求めているのであり、自然とはピッタリと波長が合うということですが、自然の大きさ、豊さに比べて、人工の舞台はいかに小さいか知らされました。

勿論厳しい自然環境もあり人々が苦しめられていることも事実であり、開発も必要ですが、

やはりバランスの問題です。

豪華な包装も、その前の段階では資源の無駄遣いであり、後の段階ではゴミの山となります。

便利な車の排気ガスが地球の温暖化につながり、先日のあのバン格拉デシユの大洪水をもたらせたサイクロンも、海水の温度が上昇することにより、最近は増加傾向にあるようで、温暖化もその一因だそうです。

物質文明が地球を破壊し、汚染し、自然を失わせています。病める地球をどう再生させてゆくのか、息の長い大きなテーマですが、もはや避けては通れない時に来ています。

自然と共生し、再生することが人類が、生存するための原点であることを痛感いたしました。

## 企業の使命

出生率の低下は深刻な社会問題であり国家盛衰の憂いありといえます。

それは現在の不安な社会を反映し、出生率の減少につながっているともいえます。

最近、学生が希望する会社の条件の中に、その会社の「社会的貢献度」というのが大きくクローズアップされているそうです。

本来、会社というのはひっくり返すと社会ということであり、社会に貢献し、存在価値のある企業ということは原点であるはずです。

ここへ来て会社の視座も「マイカンパニー」から「アワーカンパニー」、そして「パブリックカンパニー」へと大きく動いています。

人それぞれに、人生の目的と使命があるように、企業にも目的と使命があるのは当然でしょう。

勿論企業も生あるものであり、そのための生命を維持する糧は必要です。ですから適正



利益を確保することは生存するための最低条件です。

しかしそれは、あくまでも結果であって目的ではないはずだ。

目的はやはり社会に貢献する、お役にたつ企業であり、人づくり、心づくりと一人ひとりが自分を磨くことであるべきだ。

バブル経済の中で我々は本質を見誤り、目標を見失って、羅針盤のない船のように行先が分からなくなっているのかもしれない。

試練や困難の中から企業本来の目標と使命を見出し、二十一世紀の経営道を見出し、再生する時が訪れています。

満月もいつかは欠けて、やがて闇夜となり、その中から新月が再生するように企業の目的と使命を考えさせられるこの頃だ。



## 殻を破る

長い人生を生きて来た中で、いろいろな経験や体験を経て、我々は無意識のうちに潜在的にその人の考え方や価値観が創造され固まって来ました。

そのために真の意味での自分自身の人生の目的や、意義が、そうした無意識の既成観念に隠されて、分からなくなっていることがあります。

殻を破るということが、簡単なようで実は大変なことであるということを、今度の勉強会で教えられました。

何かの出来事や、人との出会いによって、この殻を破ることがあります。生死をさまよう大病によって、自分自身の真の目的を見つけたり、清水次郎長が山岡鉄舟という偉大な人との出会いによって、人生の意義や自分の使命を見出したりという事例です。

また殻を破るために、次の三つのことを改めることが大切であるといわれました。

一、誤まった信念

二、過去志向（過去にこだわる）

三、人のせいにする

問題はこの三つをどうして改めるかです。

自分自身は気付かなくても、確かに誤った信念は誰でも持っています。

お金や物さえあれば、学歴があれば幸福になれるということもある面では誤まった信念です。

また何か問題が起った時過去の経験や体験からのみ判断することもよくあります。

またうまくいかなかったとき、あの人が悪いからとか、上司や部下のせいにして、自分のことは反省せず人を責めることをよくやります。

殻を破り真我と出会うためには、常にこの三つのことを念頭において人生の目的と意義と自分の使命を求め続けて行きたいと思えます。

## 使命

『使命』とはなんですか？ 『使命』とは命を使うと書いてあるでしょう。たった一度の掛け替えのないオンリーワンの人生、しかも限られた大切な命をあなたは何に使いますか？」と言われた時、今まで簡単に「使命」という言葉を使っていたことに反省させられました。

また「あなたにしか出来ないことがありますよ」、「あなたにしか咲かせられない花がありますよ」と言われた時、今まで自分の「使命」も分からず、ただいたずらに生きてきたことに気づきました。

人は限られた時間しか人間でいられないのです。自分の一生をかけ、命をかけても悔いのない目的、使命を持っている人は幸福です。

お金や物のためにのみ命を使うのも空しく、やはり人や社会、国家に貢献できる人間になることが「使命」だと思います。

人間である以上、自我やエゴ、いろいろな欲望があるのは当然ですが、それは親の魂のような高次の自我でなければならぬのでしよう。

親の魂は決して見返りや報酬を求めません。

現在のように人が目標を見失って右往左往している時代は、過去になかったように思います。「何かが違う」「これでいいのか？」と真剣に模索している人はたくさんいます。一人ひとりが自分の「使命」を見出し命を使わなければならない時代が来たといえます。

今、時代が我々に求めているもの、微かな呼びかけが聞こえます。

我が社も創業六十年、企業にも「使命」があります。その「使命」を果たすべく、ベストを尽くさなければと感じています。

## 絆

絆という字は糸偏に半分と書いてありますが、残りの半分は目にみえない糸でつながっているかと教えられました。まさにその通りだと思います。

我々は長い経験から、自分の目に見えるものしかその存在を認めないようになっていますが、例えば「空気」「心」「魂」「雰囲気」「気配」「ムード」「流れ」「波動」など目にはみえませんが存在するものだと思います。

親と子の絆、兄弟、友人、先生と生徒、人と社会、企業と企業、人と自然、地球と人、いろいろな係わりの中で今ほど「絆」を切断している時代は過去にはなかったでしょう。

政治、経済、教育、医療のあらゆる面での「絆」の崩壊が社会の混乱につながっています。効率主義、能力主義、物質主義ももちろんある点では必要ですが、そのみを追及するあまり、そのうらはらに高齢者を粗末に扱ったり、弱い者をいじめたりという考え方が無自覚のうち意識の中に入り、現象として現れます。

お互いが目に見えない糸でつながり、多くの人から、社会から、先祖から、自然から、地球から、宇宙からそんな多くの自己以外のもののお蔭で生かされていることを知り、人や自然に対する思いやりが必要で

「人は自分のためだけに生きるにあらず」

切り離されたいろいろの係わりを認識し、強い「絆」を再結することが、豊かな人生につながるかと確信します。



## 基盤

人は、「癖」「傾き」「基盤」と言われるものを無自覚の中に持っています。

これは自分では深く気づきません。他人のことならよく分かっても、自分のことになると、全く気がつきません。俗にいう「傍目八目」おかめはちもくです。

この「基盤」はそれが良いとか、悪いとか言うのではなくて、誰でも持っているものです。国家でみると国民性であり、企業では社風、学校では校風、家庭では家風、ということですが、時代によって、地域によっても影響されます。

人は自分の「基盤」を知り、相手の「基盤」を知ることによって共生することが出来るようになります。

日米との摩擦の原因もお互いに相手の基盤を知り、違いを理解し合ったうえで交渉することが原点です。

老人、中年、青年の間も時代背景により大きくこの「基盤」が違ってきます。



何かことが起こると、無自覚のうちに、無意識のうちに「基盤」が動き、自動回路が働き、過去のインプットされたデータからすぐに答えを引き出します。しかし、自分の基盤から反射的に下す結論に誤りはないかです。

今回受けたセミナーで、「チョット待てよ」という事を常に念頭に置いて、今一度考えるという事を教えられました。「チョット待てよ」と考えるだけで今まで死角であった部分が見えてきます。

自分の「基盤」を知ることと「チョット待てよ」ということに気をつけて、他と共生する必要があると感じたセミナーでした。

## バカンスとトラバイユ

パリー祭が終わると、フランス人には待ちに待ったバカンスの季節。四百万以上の人々が海外へ行き、期間も二週間から三週間と我々には考えられないほど、バカンスを楽しむそうです。

バカンスに対して、トラバイユとは仕事のこと、そこには苦役の意味も含んでいる。そうで、バカンスのために仕事をすると考えるです。

ですから定年退職は苦しい仕事からの解放ということになります。

だとすると、人生の半分は苦しいこと、無意味なことになりかねません。

これに対して、仕事即人生・天職という考え方もあります。仕事を通して人生を見出し、自己実現を図るという考えです。

大切な米や野菜や果物を黙々と作っている農家の方々や、人の命を守る医療業務にたずさわっている方々。次代を背負う若者を育てている教育者、生活に必要なものを製造して

いる工場の人々。建物を建て、道路を造り、橋をかけている人々。その他サービス業や経営者等、それは正に仕事が人生そのものであり天職です。

人間として共通の目的、共有できる価値観と仕事に誇りを持って、その中に自己実現と人間形成の場を見出すことが出来れば、たった一度の、しかも限られた命を大切にすることにつながります。

社員同士も「生活の友」ではなくて「人生の友」となればと願っています。

人は、バカンスのためのトラバユではなくて、仕事の中に、自業を見出す人生を送りたいと念願するものです。



## まさかの時代

激動の時代とは言え、我々はよく「夢にもみなかった」とか「考えもおよばなかった」という台詞せりふを発します。それは、まさに「まさかの時代」の到来を意味します。

今まで考えられていた価値観に対する中、心軸が変わりつつあるからです。

物や金を中心軸とした時代から、人間を中心軸に置き換える時代に変わりつつあるという事です。本来、人間のためにある政治、経済、教育、医療等々が金や物のためのものになってしまったからです。

しかし、長い間我々が尺度にしてきた価値観の転換や、我々が価値の前提として来たことを転換させることは一朝一夕には実現しません。

例えば、市場は永遠に拡大し続けるという考え方があります。本当にそれは正しい思考であるかということです。限りある資源、地球環境の破壊など「地球の有限性」を認識させられる今日です。

使い捨ての時代といわれますが、これからは修理、修繕、再生の3Sで循環させることが大切です。

大きければ大きいほど、速ければ速いほど良いという前提も、偏差値最優先の教育も、業績至上主義の経営も、前提の転換をはからねば解決しません。

これからは、今までの常識が非常識となり、非常識が常識となる時代です。

「まさかの時代」には、今までの前提の転換をはかることと、しっかりとした人生観や使命観を中心とした主体性と信念をもって生きることだ、と自分自身をふり返って反省させられます。

## 確信のない時代

確信とは堅く信ずることであり、確固たる信念といえます。ことの良し悪しは別として、今ほど「確信のない時代」はかつて無かった様な気がします。

それは、今まで前提としてきた価値の基準が、大きく崩れてゆくことに起因します。政治にも経済にも教育にも、あらゆるところにそれがあらわれています。

政治の混乱は、国民の政治不信を招き、もう極限に達しているありさまですし、経済もバブルの崩壊、株価の低迷の根は深く、どの方向へ進むのか、全く五里霧中の状況です。

教育も偏差値最優先では多くの問題を生じ、限界にさしかかっています。知識のみの教育では、人間性の喪失につながります。

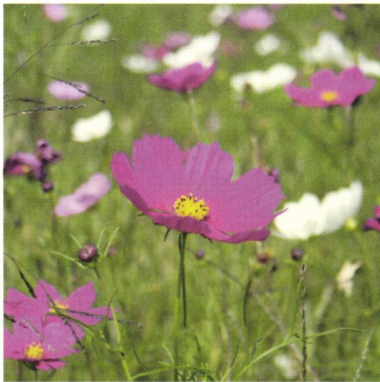
唯物的人間観が、ただ目先のこと、物や金へのこだわり、自分さえよければというエゴにつながります。

蓮の花は、個々別々に咲いているようで、水中深く地中では連なっていると教えられま

したが、今日のエゴの原因はすべて係わりがあるわけで、政治家だけを責めても、或は経営者を悪者にしても解決する問題ではありません。それは大きな流れとして、我々のエネルギーを外へ外へと拡大してきた結果であり、正に大航海時代の終焉を意味します。

これからはエネルギーを内に向けて、人間性を高める以外に道はありません。

今一度何のために生を受け、何をなすべきか？一人ひとりが人生の意義と目的を見出し、試練の中から再生することだと確信します。



## 場の成長

あらゆるところで、時代で、場所で、意識すると否とにかかわらず、「場の流れや空気」「場のエネルギー」のように見えないものが存在します。

二十世紀を考察すると、大きな流れとして巨大化、複雑化、競争社会、資本の集中化、弱肉強食の論理の前提を持った時代であると思います。

例えば、青雲の志を抱いて政治を志したとしても、政界の「場の流れ」金と力の論理が渦巻く中にまき込まれて、知らず知らずのうちにそれが当たり前のようになるのでしょうか？

経済界もナンバー1をめざして力の道、巨大化、業績至上主義という「場のエネルギー」に流され、それが当然だと思い込んでしまっています。

官界にも教育界にも、我々の建設業界にも、自分では気づかず、意識もせずになんか常識だと信じこんでいることがあります。だとすると、我々が今までの常識や発想や価値観



や信念を、思い切って新しい前提に変えていくことが必要です。

それによって、「場の成長」をうながすこと、それが本質だと思います。

「場の成長」は、政治家、官僚、経営者、教育者である前に、一人の人間であることを認識し、人間としていかに生きるか？ということだと学びましたが、我が社に、業界に、地域に「場の成長」を促進することが大切です。

しっかりとした中心軸、自分がめざす北極星を持って歩むことが、混迷の時代を生き抜くための最善の方策だと確信します。

## 本来の姿

本来とは、もともと、元来、普通、あたりまえという意味です。

よく行き詰った時は、もとに戻れとか、スタート地点にもどれといわれますが、それは途中で道に迷い、方向が狂ってしまいうことがあるからです。

今日は、大きく変化する社会の中で、それぞれが原点に立ち帰らなければならない時代です。例えば、大学は、学問をし、それを生かして社会に役立つ人材を育てるのが本来の姿ですが、今は個人の欲望や、エゴを満たすための手段に使われている傾向もあります。政治は国民のためにあるべきなのに、自分の金銭欲や権力欲を、得るための道具になっている面もあります。

「政治の本来の姿」が問われ、経済の分野でも、教育の分野でも、本来の姿とは何であったのか問い直されているのではないのでしょうか。

人が生きていくためには勿論お金や物も必要です。本来お金は、人が使うためにあるも

のであり、人がお金に使われるものではないはずで、お金に人が使われると、人生は無意味なものになります。

身のまわりの小さなことから見直す必要があります。豪華な包装もそれ以前の原素材次元では資源の無駄使いであり、後はゴミの山になります。我々が普段無意識に行っていることも、いつの間にか常識になっていることも、本来の姿はどこにあつたのか吟味する必要があります。

「本来の人間の姿」とは、日本の姿とは、企業とは、社会とは、教育とは色々な面で本来の姿が問われている時代だと思えます。

## 劣化現象

劣化現象とは、品質や性能が低下するという意味ですがこれは人間にもあてはまる面があります。

吉野ヶ里遺跡から発掘された刀剣や金具、装飾品は錆びてボロボロの状態ですが、元は磨かれ光り輝く立派なものであったはずです。長い年月で酸化され腐触してしまったのです。

人も企業も社会も国家もこの劣化現象と同じことが起ります。

近江の長浜では、若き日の木下藤吉郎と秀吉は別人であると言われるそうですが、これも天下人となった秀吉が、身から錆が出るように劣化現象に侵された結果です。

企業でもかつては名門企業といわれ、立派な経営理念をもち、活力のある企業が消え去ることがあります。

名門にあぐら胡座をかいた結果が、時代の変化に対応できなかったのかは別としても、やはり

劣化現象の結果です。

社会も国家もこのことがあてはまります。

昔と比べる気持ちはありませんが、戦前の社会には貧しいながらも心豊かな人間関係や、人と人との絆があったように思います。

金属でたったひとつの劣化現象がおこらず錆びないのは「金」だけだそうで、ですから重宝がられるのかもしれない。

常に磨かないと錆がでるように、人生も終生修業を続けることが必要であり、それが人生そのものであると学びましたが、油断や驕り、慢心という錆が出る劣化現象に気をつけることが大切です。

## 村八分

「村八分」とは、村民が申し合せて特定の村民との交際を断つという私罰的な風習のことです。

しかし、なぜ八分なのか？残りの二分は何なのか？ということは案外気付きません。二分だけ残した意味は、交際はしないけれども「葬式」と「水」については一緒に仲間に入れるということです。

生前には、いろいろと問題があり、仲たがいをしている、仏さまになれば、もう水に流すという我が国特有の考え方です。

「昨日の敵は今日の友」とか「死者に鞭打つな」というように、相手をいたわる思いやりです。

また「水」を絶つことは人の生存権にかかわることですし、相手の生きる権利は認めるという共生の原点です。

共生という二十一世紀の世界の大きな課題は、日本人がその鍵をにぎっているのかもし

れません。

狩猟民族は相手にかかわりなく自分で生きていますし、農耕民族でも焼畑農業は狩猟民族と同じ発想ですし、小麦には水はあまり必要がありません。隣人同士かかわらなくても生きていけます。

また同じ水田、稲作でも東南アジアなどは一年に二回も三回も収穫がありますし、スコールやモンsoon、大きな河もあって、水の重要性や感覚は我が国とは少し違っているようです。

オール・オア・ナッシング、敵か味方か、白か黒かというのではなくて「村八分」。二分だけは認めて生きる権利を保障するという思想こそ共生の原点です。

理解ということとは、一致するというのではなくて違いを認めるといことです。違いは違いとして認めあって共存することが必要です。

パレスチナの暫定自治調印が、イスラエルとPLOの共生の始まりであることを念ずるものです。

## ウサギとカメ

「モシモシ、カメヨ、カメサンヨ」ではじまる「ウサギとカメ」の童謡は、日本人なら誰でも知っている物語です。

この物語の教訓は、ウサギが昼寝をしてる間に、ただひたすら歩み続けたカメに負けてしまったもので、これは油断や驕りをいましめるものです。

また、はじめは脱兎の如く勢いがありますが、終わりは処女のごとく元気がなくなる飽きっぽい性格も警告しています。

カメの方からこの物語を見ると、まず、カメは向うの山の麓という目標をしつかり持っている即ちめざす北極星を明確にしている。そして「一心不乱」雑音に耳を貸さず、ただ黙々と歩み続ける姿は、あれこれと思ひめぐらし、迷い続ける自分と比べて反省させられます。

よくテレビで見る、殻を破って生まれたばかりの海亀の赤ちゃんが大海原をめざして一



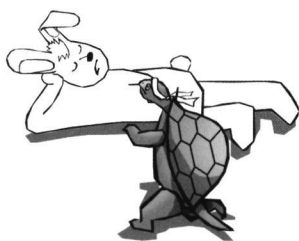
歩一歩歩む姿もめざす方向を正しく知っています。

我々も人生の意義と目的、何が最も大切なものであるか？自分の命を懸けてもやりたかったことは何なのか？はつきりとした中心軸と北極星を持つことが大切です。

経営にも全く同じことが言えます。

創業時に父がめざした経営とは？自分はどんな企業にしたいのか？この変革の時代、まさに今それが問われている時です。

せまり来る試練や困難に対して雑念を払い、社員の心をひとつにして、「一心不乱」、カメのように向うの山の麓をめざして歩み続けたいと思う毎日です。



## 踊り場

建設業界では、工事の仮設用足場の階段の中途を、広くして足休めとした所を「踊り場」といいます。

「人は誰もが人生で引き受けた条件にのまれ、その条件でしかものを見ることができなくなる」と学びましたが、その通りです。

政治家、教育者、医者、経営者、それぞれの条件を与えられ、その枠の中でしか考えられないということがあります。業界には業界の常識があり、他から見れば想像できないこともその中では普通のことになります。

この現代社会では、金や物や権力や肩書きを、最優先するという条件を我々は与えられているのかもしれませんが。その目的に向ってガムシヤラに突き進む自我とエゴが生じます。

「踊り場」で一服し一休みして、じっくり、ゆっくり、ゆっくりと自分自身を見つめ直す必要があります。たまには、リングを降りて冷静に見ないと、なんのための人生か仕事か

分からなくなります。

歴史の大きな転換期には「踊り場」に立って一服してみることが大切です。でないとならぬ中で本質を見誤り、本気で間違いをおこすことになります。

明治維新の大事業に西郷隆盛と勝海舟が、私利私欲を捨てて、「愛」を第一の動機として江戸百万の命を救い、日本を外国の植民地化から救いました。

二人の大人物がいみじくも「敬天愛人」と「天意」という言葉を残したのも、人の力の及ばない大いなる力、神理の道を知っていたのではないのでしょうか。

内政、外交ともに日本のあるべき姿、行くべき進路を見定めるため「踊り場」に立って、じっくり考えることが求められていると思います。

## ライトアップ

先日の研修会で「この世は魂を作るための修業所です。人間はソウルメイキングのために、この試練の谷に生まれて来るのです」と示唆され、さらに「このころほど恐ろしいものはありません。この試練の谷においては、事態をどう受け止めるかによって人間のころころには石とダイヤモンド以上に違いが生じてしまう」と教えられました。

コロコロと揺れ動くのが「こころ」であり、人とかかわりで動きます。ですからリーダーは良いエネルギーを発信せねばなりません。

若い時は、ある事態が発生すると、よく分からないままに反応し行動します。しかし、段々と人生を経験すると、いろいろな角度から判断し対応します。ちょうど豆電球のあかりではその範囲しか見えませんが、十ワット、二十ワット、百ワットとライトアップすることによりいろいろなことが見えるようになります。

ライトアップすることは人間の「こころ」や「魂」を磨くことによつてのみ可能なもの

だと思っています。

諸行無常、常に変わり行く世の中。富も名誉も権力も若さもすべて移りゆくものです。自我やエゴではこのライトアップは出来ません。結果としてますます光を失い、暗い闇へと進むことになります。

自己保存は集団や組織の破壊につながります。リストラや合理化ももちろん必要です。しかしユーザーを忘れ、ただ自分を守るためだけのものではあれば社会に存在価値を失うことになります。混沌の時代を生き抜く最善の方策は、この世は忍土であることを自覚し、自分自身の「ソウルメイキング」、ライトアップ以外には無いと思えます。

## 覚醒かくせい——めざめ

迷いからさめること、目を覚ますことを覚醒といいます。

振り返ってみると、自分の人生も、生まれた時、忘れることからはじまった人生。その目的や使命も分からず迷いながら生きて来たことになります。

しかも周囲から植えつけられた価値観や考え方、また時代により地域により、家庭から、先輩、友人その他いろいろな関わりの中から出来あがった自動回路を持っています。

世界的な激変はあらゆるところに見える形となって現われています。人類がかつて体験したことのない規模で揺れ動いているのです。

今まで自分が大切だと思っていたものが壊れています。

本当に大切なものを見失い大切でないものに執着させてゆく原因に目覚めることが必要です。

「二人ひとりの中に、自分を変える力がねむっている」。大変革の時は、まさに自分自身

のめざめの時でもありません。

大きくは真実の人生に対する見方を学ぶことによつて、見えないものが見えるようになる、と教えられました。

あのヨーロッパ大陸を席卷した英雄ナポレオンが、臨床の中で息子に宛てた最後の手紙。

「自分の没落の原因は、自分以外の何者でもない。自分こそ身の大敵であり、身の不幸の作り手であった。心の底にある聖なる灯。あの善に対する愛をもたなければ、何を学ぼうと役に立たないであろう」と言つた言葉には我々に早く「めざめなさい」と語っているように思われます。

“真夏の夜の夢”をむさぼる自分を反省するこの頃です。

## 選択の時代

変革の時代は選択の時代でもあります。世界的には、国家も社会も企業も大きな選択の時を迎えています。境界点に達しているさまざま現象が今、大切な決断、選択をせまっています。

二十一世紀を迎えるにあたって、存亡のいずれの道を選ぶのか？

大きな選択の時代です。

境界点とは急激な変化が起こる前の転回点のことです。それを越えらるともうどうにも止まらない勢いで動き出します。

企業でも境界点を越えた時点で、とめどなく倒産の道を進んで行きます。

夫婦間でも友人関係でもお互いに我慢したりしていますが、「ある時」ある出来事で、言葉で、もう止まらない事態へと追いこまれます。

許容範囲、治癒力、復元力、恢復力、自浄作用等を上回る状況が今の世相です。



政治家には、大きくは我が国の進路について、国連のあり方、常任理事国の問題、税制改革、日米間の経済摩擦、規制緩和、農政の問題などの選択がせまり、企業でも価格破壊、雇用、空洞化の中で決断と選択を促されています。もう安易に先送りは出来ない時にさしかかっています。

選択の時代、その判断基準となる物差しが問題です。自己保身の本能、自我とエゴ、損か得か、苦か楽か、プラスかマイナスか、勝ち負け等々比較でしか価値を見出せないのではなくて、人それぞれ自分にしか出来ないことがあり、自分にしか咲かせられない花があることを自覚し認識する必要があります。

人は何のためにこの世に「生」を受け、何をなして「旅立」って行くのか？

人間の原点が問われている時代でもあります。

## 艱難

艱難とはつらい苦しいこと。苦勞、試練、困難を意味します。

子どもの頃、よく父に「艱難汝を玉にす」とか「若いときの苦勞は買ってでもせよ」と言われたものです。人間は困難や試練に出会い、それを乗り越えて成長するということです。

苦か楽かで苦を避けた方が幸福とは限らないのです。この世は「忍土」であり、修行の場であるからです。

今までの心の状態では、背負えない事態がやってくると、ただ不安と恐怖におののくことになります。

例えば、鎌倉時代に蒙古の大群がせまり来る中で、執権時宗が禅宗無学祖元に言われた言葉「莫妄想」、妄想するなかれ。「一心不乱」人事をつくして天命を待つと教示されたように、今までの「心」では受け止められない事態が来ます。

政治、経済、社会も大きく揺れ動く年になりますが、さまざまな変化をどう「感じ」「受

けとめ」「行動する」かということです。

今の現象は、我々が人生でもっとも大切なものを見失い、大切でないものに執着した結果、理解できないことが次々と起こっています。

この試練や困難は「呼びかけ」であり、苦しいけれど未来のために避けては通れない道なのです。

「長期楽観、短期辛抱」この事態を正面から受けとめ、心の筋肉を鍛えることによって曙光が見えてきます。

苦しまなければ見えないことがたくさんあります。「艱難汝を玉にす」「我れに七難八苦をあたえたまえ」人生で本当に大切なものを見出すための試練だと認識するこの頃です。

## 半世紀

今年は、戦後五十年といういろいろな意味で節目の年です。

それは、食糧も住まいも着るものもない、精神的支柱も否定された、全くゼロの廃虚からはじまりました。

アメリカの文化に接したとき、豊かになれば、物さえあれば人間は幸福になれると思っただことも間違いではなかったと思います。「権力」「肩書」「金」「快感」の4Kを望んでいた五十年でした。

ひたすら、豊かさ、物質、有名校、便利さ、合理性、スピード、大きくオートメ化を追求してきました。

そのための画一的な大量生産方式で個性を殺すことになり、物質中心的な考え方が表面だけを見て役に立つとかダメな物と思うようになり、知らず知らずのうちにお年寄りを粗末にしたり、弱者を蔑ろにしたり、自分さえよければと自我とエゴが大きく、心を支配し、

他人のことは見えなくなりました。

唯物的発想のみでは心に空洞ができ、物質的には満たされてもやすらぎのない社会へとつながります。

成長神話の崩壊は、我々に従来の考え方や手法の限界を示唆しています。精神的なストレスは不安と不信を生み、心の空洞だといえます。

この空洞を埋めるのは人と人との「絆」であり、思いやり、助け合いです。人間は本来人のために何か役に立ちたいという思いをもっていることが、あの阪神大震災のボランティア活動、義援金や救援物資から見えてきました。

戦後五十年、我々がひたすら追い求めてきた幸福とは何であったのか？時代は大きく変わりつつあると感じます。

## 漂流の時代

目的地も進路も定まらずただ流れにまかせて漂うさまを漂流といいます。

現在の世相を漂流の時代という人がいます。それは不透明、不安、不信、不平、不満、不安定というかたちで表れます。今までの枠組みが大きく変わったことによる現象で、道標の北極星を見失った結果です。

目的地に向って確実な航海を続けているとどんな嵐や試練に遭遇しても耐えられます。苦しみの中に喜びを見出すことができるでしょう。しかし漂流の中では、苦しみだけが残り、不安と不信、不満がうずまく悪循環になります。

ある先生によると、この状態を抜け出すには、まず第一に確かな中心軸を持つことが大事。中心軸を持つための前提条件は次の三つだそうです。

- 一、この世は修行の場であり、まさに忍土であるという自覚
- 二、自分の愚かさを知る無知の自覚

三、自然界から、多くの人から生かされているという恩恵の自覚

それによって、自分は本来どんな人生を送りたかったのか？そのために今、何をすべきなのか？自分の使命は何か？という目的地と進路を決めることです。

漂流の中では再生はありません。

明治の偉人、西郷隆盛は困難や試練の時代には「命もいらぬ。金も、官位も名誉もいらないという人間でなければ乗り越えられない」と言いました。

問題を正面から受け止めて、それを乗り越え、透明な安心、信頼の未来のために今、人生の北極星を再発見することが大切だと思います。



## エレベーター人間

小生が未だ二十五、六の頃、仕事の関係で著名な高僧と接する機会に恵まれました。その方は八十歳を過ぎても頭の痛くなるような本を読み、生活は質素。一面ユーモアにも富んで素晴らしい人間味のある、徳の高い大人であることが分かりました。

ただ、不思議なのは、その方とお会いすることは楽しく、自然に話せるのです。それは、その方がエレベーターのように私の高さまで下ってきて、水平に同じ視線で対話して下さいのだと思います。上でも下でも相手の高さに自分を合わせるということです。

その方に対すると、自分を裸にしても恥ずかしいという感情は湧かないし、何でも相談したり、聞いたりできます。

これに対し、自分の位置を固定して上から話す人は何か肩がこって早くその場を逃れたいという気持ちになり、心を開くどころか心を閉じるようになります。

先日ラジオで、豆腐の効用という話をしていました。豆腐は冷奴でも湯豆腐でも美味し



くいただけるし、ちり鍋にもすき焼きにもおでんにも欠かせません。赤ん坊から老人まで親しまれ目立たないが、「豆腐がないと成り立たない料理も少なくありません。それ程重要なものです。

豆腐は、貴婦人のような「フグ」とも親しく、庶民の「ミソ汁」ともとけこむ、幅の広い器量を備えています。

エレベーターのように自在に上がったたり下ったりして相手と並んで対話できる人、豆腐のように誰からも親しまれる人——人格を磨き、徳を積むことによつて、そんな人間に成長することができるように努めたいと思っています。

## 人生とは

初盆のお参りを通して自分のまわりの方々がこの一年間にこんなにも旅立つて行かれたのかと、改めて知らされました。人生の手本のように自分の願いに生きた人、明治の気骨そのままに信念に生きた人、いろいろとアドバイスをあたえてくれた先輩、同窓会の世話に協力してくれた後輩。本当に諸行無常、常に変わり移り行く世の中だと思えます。

今年は戦後五十年という節目の年で、テレビの特別企画や雑誌、書物を通して振り返り、反省する機会がたくさんありました。

その中で気付いたことは、時代背景もありますが、常に死と対峙して生きていたということです。明日の命が分らない時代ですから、逆に、いかに生きるか？ということを実際に考えたのです。肩書きや権力や金や快感を追い求める余裕もなかったし、必要もなかったのでしょうか？ただ今日を真剣に生きることがすべてだったのでしょうか。

我々は死という現実を忌み嫌う傾向がありますが、死ということを認識することは大切

だと思いません。

それを前提とすることによっていかに生きるか？ということも、人生観も、生きざまも見えてくるのでしょうか。

自分自身の人生を振り返ってみても、安易に無駄に命を使っていたことを感じさせられます。

人生で何が大切なのか？大切でないものを追い求めてきたように思います。

特別攻撃隊の方々が生きようとしても生きられなかった若い命、阪神大震災で志しなかならされます。人生とは…印象深い詩をここに紹介します。

### 人生の時計

人生の時計は一度しかねじを巻かない

その針がいつ止まるか

おそくか それとも もっと早くか

だれも知らない

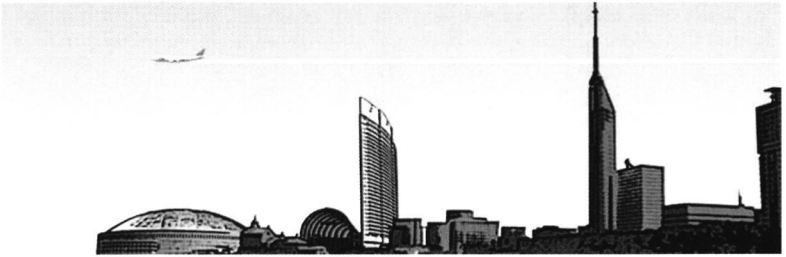
今だけがあなたの時間だ

生きよ 愛せ そして心をつくして働け

明日があると思つてはならない

なぜなら その時

人生の時計は止まっているかもしれないから



## 責任と愛

責任と愛はイコール（同じ）であると聞かされた時、初めは良く理解出来ませんでした。しかし考えてみると、全く同じであることに気づきます。

あの人は責任感が強いということは、愛を持っているということになります。家庭を愛し、子どもを愛することは責任を果たすことになります。

それは政治でも経済でも教育でもあてはまります。逆に自我とエゴの中で自分のことしか考えないと、無責任で無関係で冷たい関係になります。だとすると、政治も経済も教育もすべてのことで、その原点に「愛」が存在しなくてはなりません。

“もらう幸せ”から“できる幸せ”、さらに“あげる幸せ”へと境地を進化させることが大切であると学びました。

人は誰でも本心の部分に「愛」を持っているはずですが、しかし、現実の競争社会の中で、知らず知らずのうちに自我とエゴの原理が大きくなるのでしょうか？

二十一世紀まであと一、七〇〇日あまり。二十世紀は自我の満足する方向を快感原則に従って、快・楽・便利・豊かさを求めて、ひたすら突き進んできたのです。

しかも足るを知らない、あくなき欲望が現在のいろいろな歪みを生じました。まず、このことに気づくことからはじめねばなりません。

損益以上に真理に基づき、企業の意志決定基準とすることも必要です。ものに恵まれているのに、もの足りなく不安なもの、物から心への転換を促されているのだと思います。

それぞれの分野で「愛」を原点とし、責任を果たすことが二十一世紀への課題です。

## ディスクカバー

発見は、知らないことを見つけることで、英語のディスクカバーも覆いを除き見つけるという意味です。

先日、NHKのクローズアップ現代の放映で、ある都銀の支店長が定年で退職し、すべての肩書きを取り除いたとき、自分は果たして何をして来たのか？自分は何であったのか？自分の人生を振り返り、自分を見つけるために、四国八十八ヶ所の遍路に出かけるドキュメントが流されました。

巡礼の道すがら、見知らぬ婦人から声をかけられ、「気をつけて行って下さい」とミカンを差し出されるのですが「何のかかわりもない自分に対する、思いやりに涙が止まらない。今までにこんな気持ちにはなれなかった」ということです。それはまさに魂のふれあいに感動したのだと思います。

日頃は多忙にまぎれて、自分を見つめることも、考えることもできなかつた。自分は何



をなしたかったのか？大切でないものを追い求め、大切なものを見失っていたのではないか？と自問自答する姿がありました。

地位や肩書きや社会の柵が本当の自分を見えなくしているのではないのでしょうか。私たちは学者、政治家、経営者である前に一人の人間であると思います。

試練や困難もカバールを除くための呼びかけとも思えます。

人は、ある使命を持ってこの世に生を受け、その使命を果たして帰っていきますが、それは己を知り、使命を探すための旅であるかもしれない。

社会から、時代から、地域から入ってきた基盤のために真の自分を見失っていますが、カバールを除いて真我を見い出すことに努めたいと思います。

## 不易流行

不易とは、いつの世も変わらないものを意味し、流行とは、時代とともに変わりゆくものです。

諸行無常、常に移り変わり行く世の中で何を残し何を変えて行くべきか？今、それが問われています。

簡単に言えば、外の世界（物質を中心とした）は変わっても内面的なもの（心の中心軸）は普遍であるべきだと思います。

かつて日本で布教活動を行なった宣教師フロイスが、ローマに送った報告書の中に、日本人は世界でもまれにみる「礼節」を重んじる国民であり「勤勉」「几帳面性」などを備えた素晴らしい民族であると記されているそうです。

無秩序に無原則に新しいものを追い求めて、本来変えてはいけない人間の中心軸、座標までも失ってしまった結果、我が国古来の美徳までも捨ててしまつてはいないでしょうか。

「色即是空」、現実世界の現象面が我々の心の形として投影されているとすれば、我々の心を変える以外に、この現実を変えることは出来ないでしょう。

「こうなってしまった」のではなく「こうさせてしまった」そのことを認め反省し、一人ひとりが変わることによってのみ、再生の道が拓けます。

資源の乏しい我が国が今日までたどりついたのも先人達がかたくなに変えてはいけなかったものを守り続けたお蔭だと確信します。

現実の社会は、空洞化、雇用不安、リストラ、0—157等々様々な混沌の時でもあります。しかし、どんなときでも未来を拓く一本の細い道はあるはずと信じ愚直に歩み続けたいと思います。

## 寅さん

フーテンの寅さんこと車寅次郎氏。芸名渥美清氏、本名田所康雄さんが八月四日ひっそりと旅立っていきました。

正月にはくつろいだ気分で寅さんの映画を見るのが楽しみで、笑いとペーソス、人情、絆、自由、その他古き良き失われたものへの郷愁に時を忘れたものです。

経済成長の歪みが表れはじめた昭和四十四年八月から四十八作（観客動員数七、九五七万人）も寅さんシリーズが続いたのは、観る人が寅さんに人間の原点を感じたからでしょう。

我々が追い求めた4K、「金」や「肩書」「権力」「快感」とは全く無縁に、世間の価値観にも枠にも無関係に自由に生き、自分の幸福よりも他人の幸福を願い、他人の痛みを感じる寅さん。妹さくらを中心とした家族の絆、地域社会との連帯感、全国を渡り歩く寅さんの姿にファンは、失った自分をラップさせ、自分の故郷を思い出していたのだと思います。不安、虚無、ニヒリズムの蔓延する時代、心の空間を埋めるための道は必ずあるはず。

二十一世紀を拓くポイントは

一、自己主張——パフォーマンスよりも陰徳を

二、自分の利益より他人の利益

三、断絶よりつながり全体を

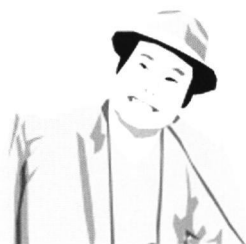
四、刹那（目先）よりも永遠に

五、直線（フィードフォワード）ではなく循環（フィードバック）

になるでしょう。

寅さんの生きざま、人生を通して我々が見直さねばならないことが多くありました。

寅さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。



## 保自から保全へ

人間は自我とエゴがあり、自分を守ろうとするのは本能で当然のことだと言えます。

しかし、そのことが引き起こす問題が結果として自分を守ることにならないのではないのでしょうか。金も肩書きも権力も自分を守るために追い求めることになります。しかし、持てば持つほどそれを失いたくないと言う不安にかられ、あくなき欲望につながります。ちようど癌細胞が自ら増殖することにより自分も滅びていく姿に似ています。

大気や水、農業、環境等々の汚染は全体に関わり自分だけ避けることは出来ません。全体と個、それはバラバラなものではなくてすべてつながっているのです。人間は生まれながらにして自分ひとりでは生きていきません。共同体の一因子であるのです。自分さえよければという自我の原理が人間関係を希薄化へと向わせ絆を切ってしまいます。

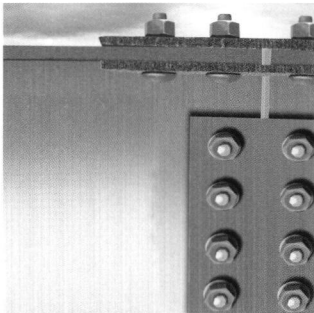
「保自」—— 自分を守ることが断絶へつながり自分を守ることにはなりません。

「保全」—— 全体を守ることが自分を守ることになるのです。

アメリカでは失業率が1%上昇すると殺人事件が6%増加するというデータがあるそうです。

今、我々に必要なことは、貧しきを分かち合い痛みを分かち合うという考え方です。事態を先送りして逃げるのではなく、腹をくくって「引き受ける」以外に道はありません。二十一世紀を目前に「保自」の道を歩み続ければ、やがてそれは破局を迎えることになります。

この真相を正しく捉えてその原因を見出し、対策を立てて実践する時です。



## 光と影（闇）

森羅万象この世の出来事には、すべて二面性があります。

表と裏、陰と陽、善と悪、快と苦、喜びと悲しみ等々。

それで事態をある側面から見ると大きな誤りをおかすことがあります。

戦後ひたすら経済至上主義を追い求めて来ましたが、その結果物質的には恵まれて、当  
時では考えられない繁栄をもたらしました。

その光の部分のみを見ると確かに豊かになりました。しかし反面、影の部分も多く表面  
化しました。環境汚染、自然破壊、本来自然界には存在しないダイオキシンの発生等々、  
何よりも人の心が自己中心主義となり、絆を絶つことにより自我の原理が支配する社会と  
なりました。

熱帯雨林の乱開発が地球の温暖化や砂漠化を進め、やがては酸素の不足という最悪の事  
態も考えられています。



規制緩和も時代の流れ。国際化の中で生き残るために通らねばならない道ですが、大きな痛みを伴います。

大きな枠組みが変わる時代にはいろいろな摩擦が発生しますが、自我の原理のみで動けば、それはとめどなく憎しみと混乱を招き人類の破滅へとつながります。

われわれが追い求めたものの陰の部分が今、大きく表面化しています。しかし闇があるからこそ光が見出されるのです。

深い反省と慚愧の念が再生への道へつながります。

「信頼」「調和」「責任」「自律」「託身」「畏敬」——失ったものを再びとりもどし、自信に満ちた希望のある二十一世紀であることを確信します。

## 新世紀

戦前は精神主義を中心とした唯心論がすべてという教育を受けてきました。

戦後は一転して経済至上主義の唯物的思考で唯心論を否定。金、物、それを得るための権力、名誉、快を求めて突き進んだのです。

唯心と唯物、本当はどちらも正しいのです。要はバランスの問題で善か悪か？どちらが真理か？と対極関係で比較する問題ではなかったのです。

さて、あと一、二〇〇日余りで新しい世紀、二十一世紀を迎えるわけですが、単に世紀が変わるといっただけでなく次の千年紀という大きな節目です。

ある勉強会で学んだことですが、昔は権威の象徴となった大きな高い建物は神社や仏閣であり、外国でも高く聳える教会やモスクを人が仰ぎ見るわけです。

その次は安土城や大阪城や江戸城など城に変わりました。外国でも今に残るキャッスル（城）や宮殿、それは武力、力の誇示であります。やがて二十世紀に入り、ニューヨークの

エンパイヤーステートビルが人々の目を奪い、巨大な建物がその偉容を誇りました。

我が国でも戦後、高いオフィスビルが聳え建つようになりませんが、それはまさに金、経済至上主義の象徴でもあります。人々が意識すると否かにかかわらず、心の反映であるかもしれません。色即是空、現実には心が形となってあらわれるということなのです。

我々が今、新世紀を目前にどんな塔を心に描いているのでしょうか？それは宗教、民族、イデオロギーを超越したひとりの人間として共有出来る価値観でなければならず、真剣に考えねばなりません。



## 共同体

共同体とは二人以上の者が協力してことをなすことと定義づけています。共同体はいろいろな形で存在します。

血縁、集落、地域、企業、家族等々数多くの共同体があります。

戦後、経済の発展により人々が都会へ集中し、種々の事情で家族も核家族化が進み、地方の過疎化現象など共同体の機能そのものがバラバラになり絆が切れてしまいました。

青春の最も春秋にとんだ学生生活も「友」を得るより、むしろライバルという意識で競争の原理のみが働けば、自我とエゴの関わりとなります。そんな中で、共同体が大きくクローズアップされました。

経済評論家の久水宏之先生によると、共同体には三つの要素があるといわれます。

一、まず、痛みを共有すること

二、目的を共有すること

三、いい、悪いという物差しを共有すること

この三つがなければ共同体は出来ないといわれ、次に「人」と「価値観」と「システム」の三つが必要といわれています。

企業は利益がなければ存在出来ませんし、利潤を追求せねばなりません。利益至上主義のみの考えでは利益共同体となり、結果としていろいろな弊害や問題が生じます。人間は何のために生き、どんな共同体をめざすのか、そこが問題です。

最近の社会現象を見るにつけ、色々反省させられます。しかし、この慚愧の念も再生するために必要なことです。

目的を共有し、価値観を共有し得る二十一世紀の共同体をどう築くか、それが今日の課題です。

## 脳力と心力

近年「脳力開発」ということが言われ、関係図書の棚を賑わしています。

確かに混沌の時代を生き抜くには「脳力」を開発し知恵を集めて対応せねばなりません。しかしそれ以前の前提として大切なことは「心力」ということだと思っています。

それなくして対処すれば、失敗した時には大きな挫折感となり、脳力だけではなく悪知恵となつてマイナス方向へ突走ることにもなります。

今日は人生を生きるための「中心軸」「志」を持って生きねばならぬ時でもあります。

多様化とか個の時代といわれ、絆の切れた時代。バラバラになったのを何によってまとめていくのか？まとめるエネルギーをどこに求めて行くのか？それが問われています。

先日ある雑誌に「こころの赤字を克服する」という記事がありました。「こころの赤字」というのは自己欲望のため、利益追求に狂奔し、他人の苦しみを顧みないということであると。

現在は「不安の時代」ともいわれますが「不安」は脳力では解決しない問題です。「不安」は頭の中にあり、「不安」という現実はないといわれますが、心の筋肉を鍛え、腹をくくつて引き受けて「人事をつくして天命を待つ」という境地の問題だということです。

昨日にこだわらず、明日を思い煩らわず、今日にすべてを、今できることを今すべきことに心を尽くすことだとも教示されました。

「その時にならないければ開かない扉があり、その時でないと見えない道がある。この事態は神の与えた大いなる試練であり、後世から見れば意味のあることだ」と感じる秋の夜長です。

## 因・縁・果報

ある先生が外（現実）は内（心）が反映しているものであり、「現実」だけを変えようとしても「心」を変えなければ現実はなにも変わらない、と指摘されました。

我々が現実をなんとかしたいとあせっても、現実だけに目を向けているかぎり事態はど  
うにもなりません。その基になっている「因」に着眼せねばならないということです。

見事な鉢植の百合の花があります。それが「果報」（結果）とすると、その花の「因」は球根ということ。この球根に「縁」としての土、水、太陽、養分がかかわって素敵な花として咲くわけです。

現在の社会現象も、それは我々の因が果報としてあらわれているわけで、誰を責めるのでもなくて我々自身が選んだ結果だということになります。

現実を打開するには我々自身の「心」、「志」思いとなる因を再生する以外にはないと思います。



金融不安も、不信が不信を呼び信用収縮が増大して益々混沌としてきます。

自分を守ることは結果として自分を守ることにならず、システムをこわすことになります。

ナポレオンが晩年「自分の没落の原因は自分以外の何ものでもない。自分こそ身の大敵であり、身の不幸のつくり手であった」といった言葉が思い出されます。

二十一世紀、いかなる国をめざすのか？どんな社会を創造したいのか？

政治、教育、医療、経営あらゆるところで今「志」が問われています。

因・縁・果報の重みを感じます。

## 立志

志とは心に定めた目的を持つということで、人生を生きて行くための根元のようなものです。

「男子志を立てて郷関をいず」とか「青年よ大志をいだけ」とか「人生劈頭一個の事あり、立志これなり」とか、よく志という言葉を目にしたものです。

二十一世紀を目前にしてあらゆるところで積年の問題が吹き出し、混沌としています。断層を乗り切るための試練ともいえます。二十一世紀は単に新世紀を迎えるというだけでなく、新しい千年紀という大きな節目の時。この転機にあたり、気持ちを新たに大志を立てるということが必要です。

政治も経済も教育も、明確な目的を持つことが必要ですし、また個人でも自分の五年後、十年後の自分の目標、目的を持って生きて行くことが大切です。

高い志を持つことで、試練に遭遇した時の気持ちは違い、それに耐えるエネルギーが生じ

てきます。

事態を引受けてこの試練には意味があると認識すれば、更に前向きにチャレンジすることが出来ます。

またこの世には崩壊の定めというものがあり、あらゆるものはそれを維持することに苦勞します。どんな高い志を持っていても、それを阻む崩壊の定めがあり、いつの間にか色あせて枯れ果てて行くことが多々あります。

高い志を維持することは自分自身との熾烈な戦いを続けねばなりません。

二十一世紀を目前に大志を立てることにより、本当は自分はどんな人生を送りたいのか？どんな経営をしたいのか？いかなる政治家になりたかったのか？今その志を見直す時だと思えます。

## 「和魂洋才」

この言葉がいつ頃からいわれるようになったのか？はつきりとは分かりませんが、多分幕末に黒船がやって来て、やがて明治へ移ってゆく中で、その頃受けたシヨックから「和魂洋才」といわれたのではないかと思えます。

江戸時代までは「和魂漢才」と言われて我が国固有の精神と、中国の学問をうまくマツチさせていました。

しかし、明治以降西洋の学問に学べと西洋一辺倒で、ヨーロッパを中心としてこの洋才を学び、戦後は西洋というよりアメリカ一辺倒で、アメリカの後ろ姿を追いかけて進んできました。そのため政治、経済、教育、医療等アメリカ化されてきたように思います。

そのこと事態は決して間違っているとは思いませんが、戦前と違い我が国固有の精神すなわち「和魂」までも捨てて「洋魂」になった気がします。

それぞれの国や地域には固有の文化、歴史、伝統や価値観があり、それによつて存在す

るものがたくさんあります。それをグローバル化の名のもとに画一的にしてしまうのは、その国の存在さえも危うくしてしまうことになります。

外国の進んだ学問やシステムを取り入れることは大切です。しかし、存在の基盤となっている「心」・「魂」の部分まで捨てて迎合するのは本来の姿を見失うことです。

その国の伝統的な精神を忘れずに調和させることが必要で、ヨーロッパでは固有の精神を大切にしているように思えます。

どんな時代が来ても「和魂」を基盤として主体性を失わずグローバル化に対応せねばと思いません。

## 真我

先日テレビで、二十歳代の青年が四国の八十八ヶ所を歩く遍路の姿がありましたが、自分を探す旅に出ているというものでした。その数は年々増えているそうです。

ただ黙々と歩いて行く中で、無我の境地になり自分を見つめる機会を求めているのです。二十一世紀の4Kといわれる金、肩書、権力、快感という価値観で生きてきたわけですが、はたしてそれでいいのか？と疑問を持つことは意味のあることです。

今の自分は、はたして本当の自分なのかどうか？まわりの価値観に左右され追い求めているのではないのか？本当に大切なものを見失い、大切でないものを追い求めているのではないのでしょうか？本当の自分はどんな人生を送りたいのか？どんな目的を持っているのか？「己を知る」ということは永遠の課題です。

人は試練に遭遇することによって自分を見い出すことが出来ます。現在の世相を見るにつけ、深い反省と後悔の念が湧いて来ますが、素直に自分の誤ちを認めることが必要です。

そのことが次の再生につながります。責任を他に転嫁して従来通りの方法では現状を抜けられません。他人のことは分かっても自分のことは見えないものです。

この試練を「真我」を見つけるいい機会だととらえて、真我を誕生させることが求められているのだと思います。

日頃は業務にまぎれて考えることの少ない自分ですが、ちよつと立ち止まって自分を見つめ直してみたいと思います。



## 人間の重さ

先日ある広報誌の次の様な記事に接し考えさせられました。

それは

- 一、物の長さはモノサシで計ればよい。
- 二、物の重さはハカリで計ればよい。
- 三、人間の重さは何で計ればよい？  
という質問でした。

戦後は特に人の重さ（価値）を計る基準として、知らず知らずのうちに「金」「肩書」「権力」「学歴」等々はつきりと目で見えるものを物差しとして来たように思います。しかしそれで良かったのか？今大きな反省の時を迎えています。

人の重さ（価値）はむしろ目には見えない無形のもので、その人の「責任感」「愛」「人間性」「徳」「公平さ」「謙虚さ」等々内面的なもので、「心」や「魂」という肉眼で見えな



いものだと思えます。

最近のいろいろな社会現象も人の重さ（価値）や人生の目的を「金」「肩書」「権力」「学歴」等々に求めた結果です。

二十一世紀の断層を越えるための試練が続きますが、それはまさに陣痛の苦しみであり、希望を持って革新をせねばなりません。「色即是空」我々の心が現実を映し出していることを思うと我々一人ひとりが苦しくても、耐えて乗り越えねばならない道でもあります。

先だつて旅立つて行かれた、かつてのミスタータイガースの村山投手が銭、金でなくて長嶋選手と勝負するためにタイガースに入団するという言葉に男のロマンを感じ、人間の重さを知らされます。

“人間の重さは何で計ればよいのか？”

## 塞翁が馬

「塞翁が馬」とは、人生の禍福は予測出来ないものだから、災いも悲しむにあらず、福も喜ぶには及ばないという意味です。

よく長所は短所であり、短所は長所であるといわれますが、長所と思っていたことが結果として短所になることがあります。苦は楽の種、楽は苦の種といわれるわけです。

無敵の武田騎馬軍団がいつも勝ち続けることによって、長篠の合戦で大敗したのも長所が短所になったものでしょう。

徳川家康が「いつも勝ち続けると、その方法を改善しないので七三で敗けることも必要だ」と言ったのは奥の深い言葉です。

恵まれ過ぎるとそれが不幸のもととなり、試練を乗り切ることにより大きく成長するところがあります。試練から逃げるのではなくて、これも必然、なにかの呼び掛けと思いい、腹をくくって引き受けることが大切です。「こうだからこうなった」のではなくて「こうだか

「こういうなれた」ということが本質です。

中小企業だからこうなった、不況だからこうなったのではなくて、中小企業だから方向転換が出来た、不況だから従来と違う方法や開発が可能であった、というようにならねばと思います。

この試練を二十一世紀を迎えるための避けては通れない道だと認識し、正面から受け止めて引受けねばなりません。

苦しくても希望を持って「元氣」・「勇氣」・「根氣」で前進しましょう。



## 北極星

これまでの価値観が通用しなくなり、銀行も大企業も国家さえも分からない現代、自分が絶対と思っていた価値観や社会が崩れて行く中で、何を目標に生きて行けばいいのか？ 今日では混迷・試練・不透明・虚無・動乱の時代と言われます。変化のスピードの速さが益々不安を募らせます。この状態はひと言で言えば我々が行くべき道「北極星」を見失って五里霧中ということだと思います。

ですからすべてのエネルギーが萎えてしまい、無気力な現象が目につきます。なんとかせねば、と目先のことばかりを考えて動くと、益々暗転の方向に進んで行く結果になります。しかし、この現状は誰がつくったのでもなく我々一人ひとりの「因」が「縁」となってあらわれているわけです。物・金・肩書・権力・快感、それが人生の目的だと信じ、追い求めたという原因が縁となって現実を生みだしたことに気づきます。

まさに「因縁果報」の原則が働いているのなら、まず「因」を変えて「縁」を整えて行

くことが必要です。それが光転に転ずる為の、そして再生する為の原点です。

それには「真の志」を立てることです。原因となる「因」をたて、「縁」としての「条件」を整えることによつて光転し、その結果としての「果報」を得ることができるといふことです。

本当に二十一世紀を目前にして暗転か？光転か？どちらの方へ進むのか？それを決定するのは我々一人ひとりの「真の志」をたてることからはじまります。見失った北極星を取りもどすことがポイントです。



## 志の風化

風化とは、風雨にさらされた岩石がしだいに崩れて行くことで、風化作用によって変わりはてるさまをいうものです。

世の中もろもろのことにこの風化作用とか劣化現象を生じます。形のない内面的な精神面にもこの作用が生じます。

青雲の志を抱いて巣立って行ったのに、いつしかそのエネルギーが消え失せて毎日毎日を惰性で生きている姿や、新しく第二の人生をスタートしたカップルが別れなければならぬ状態になったり。企業を起こした友人と袂を分かつことになったりします。それも、自我やエゴの「志の風化」によるものです。

ですから「志」を再生するため、修正するための羅針盤が必要です。自分で気づかずに違う方向へ向って進んでいるのですが、やがて取り返しのつかないことが度々あります。

初心に帰れ、とか原点へもどって、というのは「志」の風化を防ぐためのひとつの方法

でもあります。

この風化を防ぐには常に謙虚で感謝の気持を忘れないことだと思います。

先人達が感謝を忘れるなど教示したのは、そのことによつて謙虚になれ、お蔭さまという心にもどれるからだと言信します。

こと志と違つて別人のようになるのも、自分自身を含めて反省させられます。

## 内(心)と外(現実)

森羅万象、この現実の世界に起る現象は我々の内(心)の思いや願い、考え方によってあらわれるわけで、外(現実)だけを変えようとしても変わらないということです。

たとえば、自分さえよければ、という内なる思いが人の絆を切つてギスギスした人間関係や社会を形成し、経済の先行き不安が設備投資の抑制や雇用を控えて、生き残ることを考える経営を生み、ますますデフレ現象が増幅することになります。

未来は明るく希望に満ち溢れているという思いが活力ある社会を生みます。写真のネガとポジの関係のように、あらわれた現像はネガフィルムから写し出されたものであり、写真を変えるのにはネガフィルムを変えねばなりません。

そして内(心)の部分で二十世紀の価値観を見直す必要があります。

物質中心の価値観やあくなき欲望、拡大志向がひき起す環境問題や生命現象からみても、さまざまな複合汚染は明らか。本当に二十世紀の価値観が人類に幸福をもたらすのかどう



か？物質的に豊かになっても、精神的には貧しく、自我とエゴの絆の切れた社会―二十世紀の物質文明が大きな反省の時を迎え、二十一世紀は精神的文明を中心として内と外をつなぐ世紀になるべきです。

物質的には満たされているのにやすらぎのない社会それは内を無視した結果です。

未だはつきりとしたイメージが見えないだけに大変ですが、この試練を呼びかけとらえて内を見つめ、内と外をつなぐことが本質です。



## 希望

不況・失業・不安・虚無・絶望、なんとなく暗いエネルギーが蔓延している現代の世相です。絶対安泰と思っている企業が倒産したり、間違いないと信じていたものに裏切られたり、権威や信頼するものがなくなってしまうからでしょうか？

戦後どん底の苦しい時代。大転換の時代でしたが、再建、再出発を目指して「さあ出直しだ」という明日への希望を持った時代でした。

物質的には恵まれなかったけれども「心」までは失っていないかったです。どうすれば「希望」を取りもどすことが出来るのか？難しい問題ですが、「志」「絆」「創造」が大切です。

「志」とは心に定めた目的とか信念であり、人が生きて行くための原点です。どんな人生を送りたいのか？人には必ず目的があるはず。そのために「立志」「養志」が必要です。

「絆」—— 自我とエゴが絆を切つてギスギスとした人間関係や社会を生み出しています。

自分さえよければ、と自らを守ることのみに走りますが、それは自分を守ることにはなりません。それぞれの絆、連帯感、一体感を再結することが社会の活力の基となります。

「創造」—— 二十一世紀を目前に拡大志向、競争至上主義から共生の社会へ変わらねばなりません。未だはつきり見えませんが、意識の改革による価値観の転換、政治、経済、教育、医療すべての分野で活力あるシステムを新しく創造することが本質です。

「希望」がなければ人は生きられません。この試練を二十一世紀を迎える呼びかけと位置づけ、必ず道は拓けることを信じてベストをつくしましょう。

## 人事を尽くして天命を待つ

「人事を尽くして天命を待つ」——人間が企てたことの成否は人知を超える。どんなに注意を払って計画しても予期しない出来事によって実現を阻まれることがあるもの。だから人力を尽した後は神の意志に任せるしかない。やるだけのことはベストを尽してやって、結果は「天命だ」と受け止める、ということなのです。

しかし最近「人事を省いて天命を待つ」という、他に依存、依頼するという風潮を感じます。

物質的豊かさの中で知らず知らずのうちに誰かがなんとかしてくれるだろうか、どうにかなるという気持ちになつているのかもしれない。

しかし国の財政が、四割という膨大な赤字国債で賄われている現状を、いつまでも続けることは出来ないし、税収の不足は地方自治体の財政も危機に陥れています。第三セクターの赤字垂れ流しも精算しなければならず、金融にしても経営を無視して融資を続けること

はできません。

だとすると、官・民それぞれの「自立」と「自助」が大きなテーマになります。どんな時代でも自らの力で生き抜く、という心構えが肝要です。

既に問題の先送りは限界。すべての面で、敢えて“火中の栗を拾う”勇氣をもつてチャレンジする以外にありません。

厳しい事態を腹をくくって引き受け、「人事を尽くして天命を待つ」まさに我々が求められていることはこのことだと思えます。

素晴らしい二十一世紀を迎えるための通らねばならぬ道だと信じ、ベストを尽くしましょう。

## 擬（もどき）

擬とは、あるものに似ていることで、似ているけれども本物ではないということです。

動物園で飼育されたライオンがアフリカのサバンナに放置されたら、多分シマ馬に蹴られて負傷するだろうということです。

檻の中で昼寝をしているライオンとサバンナの厳しい生存競争の中で、自らの力で生き抜いてきたシマ馬との違いです。自分の力で餌を食ったことのない過保護で育ったライオンは、生きて行く力を持たない「ライオン擬」になっているのです。姿、形は百獣の王ライオンでも、実際はライオンとは似て非なるものです。

物質的に恵まれ、過保護で育った人間も、自らの力で生き抜く気力も勇気も失ってしまい、「人間擬」になる恐れがあります。

よく言われた言葉に「若い時の苦労は買ってでもせよ」とか「可愛い子には旅をさせよ」とか「艱難汝を玉にす」。若い時の苦労はみな貴い経験となって、将来の人生に役立つと。

右肩上りの成長の中で育った私も、この試練にチャレンジすることにより本物に脱皮出来ることを信じます。

政治家も教育者も「擬」を捨てて本物になることが必要です。数年前に福岡シティ銀行の創設者、四島一二三翁の記念館で見た言葉の中に、「順境は人を殺し逆境は人をつくる」とありました。まさに今日の試練は二十一世紀を迎えるために、神の与えた試練であると信じチャレンジしましょう。

「天は自ら助くるものを助く」

## 困難・試練・後悔・失敗

困難・試練・後悔・失敗どれをとつてもイメージとしては避けて通りたいものばかりです。しかしよく考えてみると、悪いことばかりではないような気がします。自分はなんのためにこの世に生を受けたのか？なにをなしてどんな人生を送りたいのか？自分の使命はなんなのか？

困難が来ることによって人生を考えますし、人生が見えて来るようになり、いかに生きるか？ということに気づきます。

試練に出会うから、従来の方法を改めることが出来るし、脱皮し成長する機会を得ることになります。人は試練が来ないと変えられないものです。

また事態を他の責任とせず、自分のことと捉えて深い反省と後悔が再生する基となります。

成功体験よりも失敗体験の中から多く学ぶことになり、失敗を生かすことにより貴重な



学びとなります。山中鹿之介が「われに七難八苦を与えたまえ」と月に祈った話や、論語の中に「過ちを改めざる、これを過ちという」とあるように、素直に認めて改めることが大切です。

人生、七勝三敗がいいというのは負けることにより反省し改めるということです。だから困難や試練を前向きに受止めてチャレンジする必要があります。

因・縁・果報の法則でも果報自体は変えられないけれども、因を改め縁を整えることにより果報を変えることが出来ます。

困難や試練も呼びかけと捉えて、自分が変わることが本質です。腹をくくって引受け「人事をつくして天命を待つ」のみです。

## 欲望とコントロール

欲望は抑えるな、しかしコントロールせよ、という言葉があります。

欲望そのものは悪いことばかりではなくて、むしろ必要ですし、人が生きてゆくための大切なものです。欲望があるから努力もし、進歩や発展があります。

しかし、本能のままに欲望を満たそうとすると自我とエゴのとんでもない社会が出現します。もうすでにそんな社会になってしまった感のある最近の世相です。欲望をコントロールすることなくあくなき欲望のままに行動することが問題です。

子供が欲しがるものをすべて与えると、確実にその子はわがままな自己中心の子供になるといわれます。ジャングルの摂理で、肉食動物のライオンも自分が、満腹の時は隣に物がきても絶対に殺生しないといます。あくなき欲望は、やがてジャングルの体系をこわして自分自身も生きられなくなることを知っているのでしょうか？

最近の少年犯罪もある面では被害者のところがあります。健全な社会が健全な青少年を

育むわけで、大人が反省することがたくさんあります。大人の社会が子供に反映していることを思うと、青少年だけを責めるのでは解決にならないでしょう。自分自身が変わることが本質です。

欲望のままに生きるのではなくて、社会の秩序やルールを守り、コントロールすることが大切です。自分の思い通りにいかないのが世の中だとよく言われましたが、その意味が少し理解出来る年齢になったのかと思います。



## 成功は失敗のもと

「失敗は成功のもと」という言葉があります。失敗の中から学び、反省することによって、成功につながる、ということなのです。

しかし、世の中が大きく変わり、従来の枠組が根本から変わってゆく時代は、過去の成  
功体験が邪魔をすることがあります。その意味で「成功は失敗のもと」ともいえるわけです。  
諸行無常。世の中、常に移り変わり行くのが当然と思っても、人はなかなか現状を変え  
るのは難しいものです。

まして成功体験というのは、簡単にこれを捨てることが出来ません。連戦連勝の武田の  
騎馬軍団が、長篠の戦いで織田、徳川連合軍の鉄砲隊に負けたのも、時代の変化に対応出  
来なかったものですし、日本海海戦の完全な勝利は、巨艦、巨砲、至上主義を産み、空軍  
を中心とした航空機の時代に遅れることになります。

最近の世界を大きく変えるIT産業でも、わが国はシンガポール、香港、台湾、韓国に

も遅れをとっているとのことでは。

原因はいろいろありますが、戦後我が国の経済発展に貢献した官僚主義の行政や各種の規制、護送船団方式等の成功体験が国際化に取り残されている様に思えます。政治、経済、教育、医療あらゆるところで問題が発生していますが、二十一世紀は物質文明と精神文明の融合が最大のポイントです。

大きな変革には大きな困難と試練を伴いますが、みんなが共有出来る価値観を持つことが大切です。人と人、人と自然、人と社会の絆を再結することが本質です。物心両面の真の豊かさをめざしてチャレンジします。



## 内(心)と外(現実)をつなぐ

二十一世紀を迎えて、どんな世紀になるのか？どんな時代がやって来るのか？思いめぐらすことがよくあります。戦前戦後の激動の時代を過ぎて新世紀を迎えましたが、私は一九三三年生れなので二十世紀の丁度三分の二を生きたことになります。

戦前は精神至上主義で物欲を抑えて、ひたすら質素儉約を旨として生きてきました。戦後は一変して経済中心物質中心の価値観で突き進んできました。その結果、自我とエゴの心の荒廃する社会となり絆を分断することとなりました。

「物」か「心」という二者択一の考え方ではなくて、物心両面のバランスということが大切です。

内と外、「心」と「現実」は関係がないのではなくて、まさに表裏一体。我々の思いが現実の社会をつくっているとすれば、一人ひとりが自分を変える以外に道はありません。

戦後再生のための原点にあったのは、アメリカの圧倒的な物質の文明に接し、物ささえあ

ればと経済中心の考え方で「経済の力」を前面にして歩んで来ました。確かにそれは今日の物質的な繁栄をもたらしたのも事実です。しかし、癒されない「心」を失ったもの的大眼睛に気づくのもまた現実です。

二十一世紀を迎えて大きく枠組が変わるなかで、いかにして進路を見い出すかということがポイントです。

一人ひとりの「内なる力」によってしか、この試練は乗り越えられないと思います。自分が変わり、その変わった自分が世間とかかわることにより少しずつ確実に変わってゆくと確信します。

内（心）と外（現実）をつなぐこと、物と心のバランスを保ちながら新しい千年紀が人類にとって真の幸福な時代になることを祈らずにはいられません。

## 諸行無常

諸行無常とは「万物は常に變転し、しばらくとも同じ姿形を保ちえない」ことで、常に移り変わりゆくのが当たり前ということなのです。

けれども人には変わりたくないという思いがあり、成功体験や順調に推移する時はなおさらです。

大きな枠組が変わる時代。変化の規模は大きく、スピードは速く、ついて行けない状態です。しかしこの変化に対応出来なければ滅びてしまいます。

変わらないことは良いことで、変わることは悪いことであるという考え方が案外身につけているのかもしれませんが、「お変わりなく」とか前任者から「踏襲する」ということになります。

変化は何かを失うことと思っっていますが、変化とは何かを得ることであり、変わらないのは消えてゆくことです。変わるのが当たり前と思うか、変わらないのが当たり前と思う



かによって人生は大きく変わります。

経営とは変化を予測し、変化に対応することであるといわれますがまさにその通りです。

ベストセラーになったスペンサー・ジョンソンの「チーズはどこへ消えた？」の中に

一、新しい方向に進めば新しいチーズが見つかる

二、従来どおりの考え方をしているは新しいチーズは見つからない

三、早い時期に小さな変化に気がつけばやがて訪れる大きな変化にうまく対応できる

とあり、変化を恐れず変化を楽しむことが大切です。

※「チーズ」とは私達が人生で求めるもの、つまり仕事、家族、財産、健康等々の象徴です。

## 仕方がある

二十世紀のパラダイム（枠組）が通用しない時代がやって来てあらゆるところで変化の風が吹きすさぶ状態です。

最近よく耳にする言葉に、不況だから「しようがない」とか「仕方がない」等々責任を他のせいにしてあきらめる傾向があります。しかし、従来の発想では仕方がなくても変化に対応することによつて、新しい方法で活路を見い出すことが出来ることを学びました。

ある人が、これは四百年に一度の割合で起こる大変化の時代だと言っていました。そうかもしれませんが、千二百年は鎌倉時代蒙古の襲来、更に西暦八百年は聖徳太子の大化の改新です。

北条時宗が、この事態を腹を括つて引受けて、人事をつくして天命を待つという心境にいたつたように「仕方がある」という発想で、一本の細い道を見つけていることは可能です。人は無限の可能性と大きな潜在能力を秘めています。

心の持ち方によつて埋もれてしまうか？発揮できるか？ということになります。内なる人間の力をひき出すことによつて、二十一世紀は拓けます。自分自身は変わらずに相手が変わつてくれることを期待し、状況が変わつてくれるのを待つのではなくて、まず自分自身が変わり、そして変わった自分が事態とかかわつてゆくことにより、変えることが出来ます。

「仕方がない」という思いが事態を仕方なくしているわけで、「仕方がある」はずという思いが必ず道を拓いてゆくと確信します。

## 二十一世紀の羅針盤

世の中の試練は二十世紀と二十一世紀の狭間の断層の中で混乱が続いています。あまりにもこの断層が大きく深く、なかなか埋められない状態です。

二十世紀は経済を中心とした拡大志向で、もつともつとを続けてきました。そして「現象」肉眼で見える形のあるもののみにか、価値を認めなかった時代といえるかもしれません。

開発という美名のもとに自然を破壊し、自然体系も狂わせてしまいました。のみならず、人の心も人の道も無茶苦茶にしてみました。しかしそれは現象としてあらわれた我々の心の様相だとしたら、二十一世紀の羅針盤は我々の内なる心を変える以外に道はないと思います。

従来の価値観を破壊し新しい価値観を創造する必要がありますが、それは外の現象のみを見ての価値観だけでなく人間の本質にかかわる内なる精神面の価値観が大切です。

最近の社会面の記事も以前には考えられなかったことばかりです。内なる「心」や「魂」

といった人間の根元にかかわることを無視し、現実の物質中心の考え方が現象となつてあらわれています。

土地至上主義や種々の制度を破壊した織田信長が、現在盛んに読まれているのも、行き詰まった閉塞状態を従来の価値観を変えた信長に求めているのかもしれませんが。

しかし、最も本質的なことは我々の意識（心）を変えられるかということが原点です。人はなんのために「生」を受け、なにをなして旅立ってゆくのか？どこから来てどこへゆくのか？そのことを考えることが二十一世紀の羅針盤になると信じます。

## 私変わります

春に誕生した「いのち」が夏の盛りを迎え、やがて秋になり寒い冬に移ってゆく。

青春、赤夏、白秋、黒冬と四季があるように、人生にも青春期から働き盛りの壮年期を過ぎて老年期を迎えるように、森羅万象すべて移り変わり一時もとどまることはありません。いいことも、悪いことも永遠に続くことはありません。

しかし、人は絶好調の時はこれが永く続くと錯覚し、つい油断や驕りが生じ、やがて亡びてゆくことになります。逆に悪い時もこの状態がいつまでも続くと思い込み、不安と恐怖におののき気力を失ってしまいます。世の中には「崩壊の定」があり「いのち」もやがて衰えてゆきますし、組織もバラバラに崩れてゆき、システムも色あせてしまいます。強い鉄も劣化現象によって錆びてしまうのも事実です。

しかし、逆に「いのち」を生み出す力、創造の力、再生のエネルギーがあるのもまた事実です。「こうだから、こうなった」ではなくて「こうだからこそ、こうなれた」というの

が本質です。

「不況だからこうなった」というのではなくて、「不況だからこそこうなれた」ということが大切です。

不況だからこそ変わることが出来たし、変えることが出来た、新しい道を見出すことに成功した。まさに自分自身が変わることにより、まわりを変えることになります。

相手が変わることを期待するのではなく、環境が変わるのを待つのではなくて、自分自身が変わることです。

極まれば変ず、変じざれば滅す。変わらなければ亡びてしまいます。創造、再生のため「私変わります」を実践し一本の明るい道があることを信じチャレンジしましょう。

## お天道様はお見通し

「お天道様はお見通し」子供の頃によく祖父や祖母から聞かされた言葉でたびたび耳にしました。

お天道様はどんなことでもすべて見ておられるから偽ることは出来ないということ、自分が行動する基本のようなものです。常に自分自身に自問自答し行動するのだと思います。

人生を生きるための物差しのような役割を果たす言葉です。正道を歩んで失敗したらあきらめられるが、邪道を行って失敗したら悔いが残るといわれます。最近の事件は邪道を行って取り返しのないことになっています。自分だけでなく周りの多くの人々に大変な迷惑をかける事柄が増えています。それは我々がこの世で大切だと思つて追い求めているものがそうではなくて、大切なものを見落して大切でないものを得ようと努めているのではないのでしょうか？



「人間学」とか「人の道」とか人生を生きるための中心軸、よりどころを持つ必要があると思います。その原点は、人は何のためにこの世に生を受けてきたのか？ということだと思います。それぞれが使命を持って生を受けたわけですから、何のためにたった一度の限りある命を使うのかということを実際に求めて行かねばなりません。金や権力や名誉だけが目的ではなく、もつともつと大切なものがあるはずですよ。

「お天道様はお見通し」という言葉は「正道を行く」ということにつながって行きます。そういえば以前は「渴しても盗泉の水は飲まず」とか「武士は食わねど高楊枝」「山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し」と常に自分自身を律する言葉がたくさん用いられましたが、現在はほとんど死語になっています。

いろいろな格言や金言を甦えさせることが現在の不祥事や人の道はずれた行動をなくすことになるのではないのでしょうか？

## 求心力

求心力とは物体が円運動をする際、円の中心に向かって働く力です。国家、社会、企業でも組織をまとめる求心力、共通の目的が必要です。

例えば、企業の求心力となったのは戦後一貫して右肩上がりの経済の中で、確実に年々上昇する「給与」と企業の成長の段階で増え続ける「ポスト」が大きなウエイトを占めていました。しかし、バブル崩壊後の構造改革、デフレ経済の時代「給与」も「ポスト」も求心力となり得ません。

二十一世紀の求心力とは？まさにそれが問われている時です。二十世紀の物質中心の拡大主義が資源、環境の破壊をはじめ人々の心の荒廃、絆の分断等々、さまざまな現象となって表面化しています。これまでは「利」の追求を自己目的とすることによって、人間を主役の座から手段の座にしてしまったということなのです。

人間が目的達成のための手段、道具でしかないというまさに本末転倒という馬鹿げ

たことになったのです。従来の「利」を中心とした考え方、生き方から精神（内）と現実（外）を融合する「義」を前面にたてることが大切だと思えます。即ち「正義」とか「大義」とか「人の道」という人間の本質的なものです。失った心を取り戻し、人と人、人と自然、人と社会との絆を再結することにより人間の尊厳を高め、心豊かな物心両面のバランスある社会、国家を再構築することです。

この混沌の時代を乗り切るのは科学の力、経済の力だけではなくて、内に眠っている力、人間の力を呼び起こす以外に道はないと思えます。

外（現実）だけを変えるのではなく、内（心）を変えることによってこの八方塞がりの状態を脱することができません。志をもって未来を拓くため、新しい求心力が必要です。

## 再生

再生とは、まさに字の通り再び生まれ変わり、よみがえるということですが、優れた組織もシステムも長い年月の経過とともに金属疲労を起すことになります。

戦後一貫して続いてきた五十五年体制といわれる政治、経済、教育、医療とあらゆるところで綻びが見えてきました。それが陣痛の苦しみとなり混乱が続いています。それは経済を中心とした拡大主義、物質中心主義、目に見えるもの形のあるもののみを信じた結果であつたかもしれませぬ。

最近の風潮として、自己中心、責任転嫁、志の劣化ということがこの混乱を益々複雑にしています。絆の分断は、家庭でも企業でも社会でもあらゆるところで起こっています。自分さえよければという自己中心の考え方、責任を他のせいにして自分を守ろうとする責任の転嫁、志の劣化による安易な生き方が問題を起こしています。分断された絆を再結し、再生、再起するためにどうすればいいかということなのです。自分はどこから来てどこへ行く

のか？今何故ここにいるのか？何をなすために生を受けたのか？自分は何に命をかけるのか？一人ひとりが真剣に考えることが大切です。

この変革の時代を近代日本の夜明けとなつた明治維新とするのか？京の都を焼野原とし、戦国時代の幕開けとなり百年以上にわたつて混乱を続けた応仁の乱とするのか？大きな岐路にさしかかっているように思います。

それは我々一人ひとりが人間復興の道を選ぶのか？自己中心の自我とエゴで生きるのか？がポイントです。内（精神）と外（現実）をつなぐことが出来るかどうか？まさに正念場の時を迎えています。我が国再生へのラストチャンスが訪れようとしています。

## 自己ベスト

年初から今年のキーワードの「自立」「自助」「自己責任」「行動」といった言葉をよく耳にします。相手や環境が変わるのを待つのではなくて、自ら変わって行動し失敗を恐れずチャレンジ精神で腹を括って試練を引受け、人事を尽くして天命を待つということだと思います。

この試練は一人ひとりの人間の力（内なる力）を發揮することが出来るか？ということになります。

人それぞれに能力の差はあっても、それぞれが毎日毎日を自己ベストを出すことによって大きな力となってあらわれます。

ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんもノーベル賞を目標にしたわけではなくて、毎日毎日愚直に努力を積み重ねた結果であったと思います。

大きな壁にさしかかって自ら戦意を失うことがあり、戦う前から負けてしまうことにな

りますが、そうではなくて失敗を恐れず躊躇することなくチャレンジすることが大切です。失敗してもまた出直すことも出来ます。試練を避けるのではなくて引受け、新しい道を求める時です。

自己責任の時代といわれ、あなたまかせや他に依存するのではなくて自らの力で殻を破る時代です。

「自立」「自助」「自己責任」すべて自己ベストをめざすことです。

自分自身を振り返っても高度成長の中で安易になり、他に依存することが多々あったように思います。「くれない族」といわれるように、なになにをしてくれない、こうしてくれないと自己責任を失った時代がありました。かつてケネディ大統領が国家がなにをしてくれるか？というのではなくて、国家になにが出来るか？と訴えた言葉を思い起こします。

「時は命」限られた時間しか生きられないとするならば、毎日毎日自己ベストをめざして生きることが命を大切にすることであり、自分の使命を果たすことになります。

正念場の今年は全員が自己ベストをめざしてチャレンジしましょう。

## 変革

手紙の書き出しに、「その後お変わりなくお過ごしのことと存じます」というように自分の思いの中に変わらないことは良いことである、という潜在意識があるのでないでしょうか？また大きく変わることは「大変、大変」ということになります。

動物の進化の過程の中で、強いから生き残ったのではなくて、環境の変化に対応したもののみが残ったのであり、企業でも環境の変化に対応できなければ滅することになります。過去の成功体験のみにこだわっていると取り残される結果となります。環境が大きく変わって来る中で、まず自分自身が変わることが必要です。その変わった自分がまわりと係わることによって変化がおこります。自分は変わらず他を変えることは無理です。

諸行無常、常に移り変わるのが当然と思っても変わることは痛みをとまなうし、不安がつるので変わりたくないという思いが強くなります。よく祝いの席に海老が準備されますが、あれは海老のように殻を破って成長し続けなさいという意味だそうで現状維持



は有り得ないのです。

「修己治人」という言葉がありますが、これはリーダーになるにはまず自分を修め磨きなさいということで、自分が変わらなければ人は変えられないという教えです。

試練や逆境は人を育てるといわれます。冷に耐え、苦に耐え、それを乗り越えることによつて人は成長するといわれますが、順境の中からは決して人間形成は出来ないといわれています。「艱難汝を玉にす」という言葉の重みを感じます。

有史以来といわれる大きな変革の時代、変化の大きさと速さには戸惑いを感じますが、変わらなければ滅してしまうことを認識し、常に希望を抱いてチャレンジすることが本質です。

## 孤独と刹那

現代社会をあらわしている言葉に孤独と刹那ということがあります。

孤独とはひとりぼっちの生活とか、孤児のようにさみしい境遇におかれているとか、または精神的に孤独な状態におかれることで、刹那とは非常に短い期間、ちよつとの間、瞬間のことであり、刹那主義とは過去や将来を問題とせず、現在のその瞬間さえよければという考え方です。

現在はいろいろなところで「絆」が切断されています。家庭、企業、地域社会でも「絆」が切れて人はますます孤独へと流されて行きます。以前は、お互いに支え助けあつて生きて来ましたが、物質文明の発達は自己中心主義、自分さえよければという考え方となり、相手との絆を切ることにより、ますます孤独へと向かつて行きます。

以前の村を中心とした社会、共同体が崩壊し、それに変わつて企業が共同体の役目を果たす時期がありました。グローバル化とともに終身雇用制度や年功序列の賃金体系も崩

れ、ますます孤独の時代へと変化しています。そのため将来の夢や希望を失い、今がよければと刹那的な考え方になるのです。それは目に見えるものだけに価値を認め、外へ外へと進んで行ったからです。精神、心、魂など内なる人間の本質的なものを捨ててしまった結果だと思っています。

社会で企業で家庭で、絆が切れた最近の状況はまさに孤独と刹那の現象です。内（心）と外（現象）を結ぶことによつて本当に人間らしい社会の再生をめざして一人ひとりが変わる事が大切です。「唯心所現」我々が心で思ったことが現実社会にあらわれるとするならば、まず自分自身が変わり、夢と希望の持てる社会をめざして失われた絆の再結を願っています。

## 魂願

魂の願いは自分がどんな人生を送りたいと願っているのか？

本当にやりたかったことは何なのか？

その願い通りの人生を送ることが本願です。

自分の願いに生きると、充実感や満足感があり心も癒されます。

ある人が自分の人生を振り返ってある程度の「財」もなし「地位」や「名誉」もそこそこに得たけれども、何かが違う。これでいいのか？このまま終わってしまったていいのだろうか？と真剣に悩んでいる姿がありました。それは自分自身の本当に心の底からの魂の願いとは違っているからでしょう。

魂の奥深くに潜む本願は、いろいろな柵に覆われて、なかなか本当の自分が見えなくなっています。まわりからいろいろと影響を受けて積み重なっています。それを一つ一つ取り除くことによって「魂願」があらわれてきます。カバーを一つ一つデイス（取り除く）す

ることにより本願に到達することになります。だから「発見」することをディスカバーと  
いうのだと思います。

自分自身を振り返ってみても損か得か？苦か楽か？プラスかマイナスか？で選んでいる  
ようで、なかなか魂願はわかりませんが、何か使命をもつて、願いをもつて生まれてきた  
のだと思います。ですから本当に自分がやりたかったことをこの人生で実践すること、願  
いと人生と生活がひとつになることが使命をまっとうすることになるのだと思います。

魂願は一人ひとり違うのが当然ですから、自分の物差しでは計れないものです。不便な  
途上国でボランティア活動をする人、朝早く町を掃除する人、小学生の交通安全のため交  
通整理に汗を流す人、それぞれの思いや願いがあるからです。

損か得か？苦か楽か？プラスかマイナスか？ではなくて魂の願いに生きる人生を送るこ  
とが本質です。

## 原点回帰

もともとの地点に帰ることであり、スタート始まりのところへ戻るという意味です。

原点とはもともとの願い、果たさなければならぬ目的。

大切にしなければならぬものです。

原点に戻って初心に帰って行動し対応することが必要です。

戦後導入された民主主義の優れた点はたくさんありますが、その陰の部分として責任感が希薄になった点が目につきます。

その原因のひとつに「みんなで渡れば恐くない」とか住民投票の意志でとか、多数決で決まったことであるとか、知らず知らずに自分の責任であるという意識が薄らいでいるのでしょうか？

民主主義の根本である「権利」と「義務」の部分で「義務」ということを忘れて「権利」ばかりを主張すると責任感を失うこととなります。

忘れていた義務、責任感を再生させねばなりません。

今いろいろな所で原点回帰、この企業の存在価値は、今までのシステムの見直しは、果たしてこの組織は今も必要であるのか？

そういうことが問われています。

趣味の世界でも釣りの会の方が「へら鮎に始まりへら鮎に帰る」というそうですし盆栽の趣味の方が「松に始まり松に帰る」と言っていました。

事件の捜査でも行き詰まったら現場へ戻れと言うそうです。

初心に帰れともいわれます。

原点回帰、そもそもこの「いのち」は何であったのか？惰性で続けるのではなくて「リバーズ」再び生まれ変わることが本質です。

めまぐるしく変わる世の中で原点回帰で反省し、私変わります。でチャレンジせねばと思いません。

## チェンジ（変化）

最近の変化の早さには目を見張るばかりです。

諸行無常、常に移り変わり行くのが当然と思っけていても、変わりたくないという思いや、変わることは悪いことであるという考え方や不安、いやなことという意識がどこかにあるように思えます。

変わらねば、と頭で理解してもなかなか実践を伴いません。

手紙の挨拶の序文に「その後お変わりなくお過ごしのことと…」と書いたり、就任の挨拶で「前任者のやり方を踏襲して」とか退任挨拶で「恙なく仕事をすることができました」というように変わらないことは良い事だという意識は無意識のうちに潜在意識として持っているのではないのでしょうか。

しかし変わらないもののために変わる必要があります。

例えば命を守るためには肉体は常に新陳代謝を続け変わらねばなりませんし、企業も社

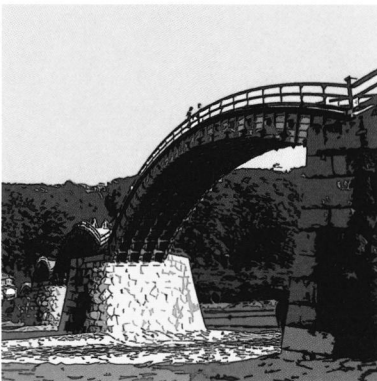


員の生活を守るために常に革新を続けねばなりません。

よく祝事に海老の料理がありますが、あれは常に殻を破って脱皮し成長を続けなさいという意味だそうです。

自分は変わらずに他は変わってほしいと思ってもそれは無理なことです。

まず自分が変わり、変わった自分がかかわることにより変えていく以外に道はありません。我が社発展のため、社会や国家のためにも「私変わります」を実践したいと思います。



## エネルギー

物体が仕事をなしうる能力とか、「電気」「精力」「元氣」というように書かれています。いずれにしても肉眼では見えないものです。人には自分では気づかなくてもエネルギーを発散しています。誰かと会って話すと楽しくて元氣が出てくるし、時間の経つのも忘れる人がいます。相手のエネルギーを受けて充電している状態です。逆に会うと疲れて氣力が失せて早くこの場を退散したいと思う場面もあります。それはエネルギーを奪われている状態です。沈んで重苦しい空気の中にある人が入ってくると一転して、明るい場に変わることがあります。その人が元氣な陽の氣を持つているエネルギーを運んでくるのです。また逆に楽しい雰囲気の中にその人が来ると、水をかけた様に冷たくなることもあります。楽しくて好きなことをやっている、以外に疲れないものです。楽な仕事でも「いやいや」やっていると疲れが倍加します。

人が持っているエネルギーは不思議なものです。自分が放出しているエネルギーが人に

勇気と元気を与えるエネルギーか？人が暗くなりやる気をなくすエネルギーか？反省させられる思いです。

よく本気は本気を呼ぶと言いますが、真剣な気持ちでまじめに努力する姿に、人は感動し動くものです。

ですからまず自分自身が本気になることが本質です。口先だけでは人は動かないことは明白です。あの人があんなに本気でやっているの、応援しようという気持ちになるものです。まず自分自身が変わり本気になることが、周囲を変えて本気を呼ぶことになります。それぞれが本気になることにより素晴らしいエネルギーで響働する我社の創造に全力をつくしましょう。

「できる、できないは能力の問題ではない、意志の問題である」

## もったいない

我々が以前使っていた言葉で現代はすでに死語になっている言葉がたくさんあります。

「躰」「滅私奉公」「武士道」「先憂後樂」「国策」「愛国」「大和魂」等々現在も必要な言葉がたくさんあります。

その中で最近話題になった言葉に「もったいない」というのがあります。我々子供の頃は毎日のように聞かされた言葉です。

先頃来日したノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリマータイさんという環境副大臣がこの言葉と精神に深く感動し各地の公演で「もったいない」ということを伝えているそうです。

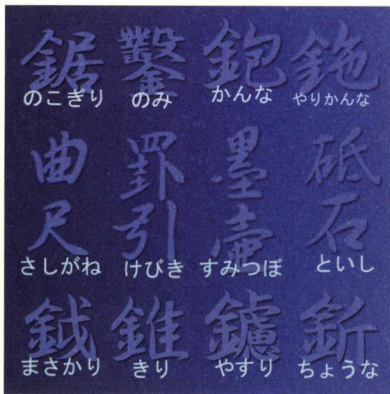
この言葉の意味は「おそれおおい」「恐縮なこと」「無駄に使うのは惜しい」「身分不相応」など感謝やお蔭さまにつながり日本人の謙虚さを表す言葉です。

環境問題にも大きくかわり、消費は美德といわれ、湯水の如く大切な資源を無駄に使

い大量のゴミを出し環境を汚染し破壊することになります。

西行、良寛、芭蕉、尊徳等々「もったいない」という生き方はまさに日本人の心の原点です。

子孫に美しい地球と環境を残し助け合い、相手のことを思いやる、そんな社会を創造する為「もったいない」という言葉はキーワードになるのではないのでしょうか？



## 「和を以って貴し」

この言葉は聖徳太子がいわれたそうですが、当時の背景を考えてみると、我が国古来の神道にたいして、渡来人による佛教がもたらされ、蘇我氏と物部氏の争いといわれる仏教派と神道派の争いがありました。

それにより仏教を中心とした中央集権国家の道を歩むことになります。

しかしこの時徹底的な争いを避けて神仏混合といわれる相手を認めるといふ考え方がおこりました。

まさに聖徳太子のいわれる「和を以って貴し」ということです。

相手を理解することはお互いに違いを認めるといふことです。

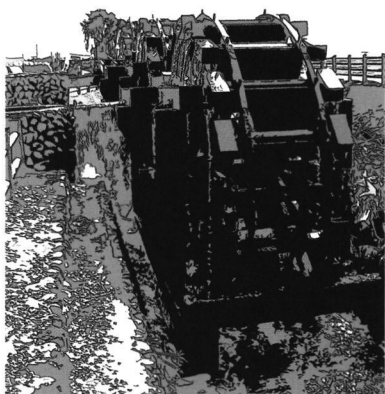
違いを認め合うことによつて相手を理解し共存、共栄、共生の道が開けます。

しかし最近の宗教の対立、民族の争い、自分以外を認めない関係は争いによつてしか解決できない状態です。

我々の社会でも、親子、兄弟、人と人との関係で些細なことから人を危める争いが多くありました。

今こそ「和を以って貴し」お互いに違いを認め相手を理解することによって共生することが大切です。

二十一世紀は国際化の時代といわれますがまさに今そのことが問われているのです。



## 八つの珠

今年は「戊」の年というわけでもないのですが、テレビや芝居で「里見八犬伝」が放映され上映されています。その中で八犬伝の八つの珠ということを書き出しました。

それは「仁」「義」「礼」「智」「忠」「信」「孝」「悌」という八つの珠で、戦前は毎日のように聞かされた言葉です。先人達は人生の指針としていたのではないのでしょうか？それがある時「悪」「淫」「盗」「愚」「邪」「狂」「乱」に変わるといふくだりがありますが、現在の世相にあまりにも当てはまり、びつくりしています。狂った世の中とか、乱れているとか、悪の横行する時代といわれますが、八つの珠が逆の方へ動き、間違ったマイナスの現実となっているのでしょうか？

「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」ということは「正しい」「まこと」という事が強調され、「うやまう」「すなお」ということがいわれています。我々が生きていく為の基本となる言葉を失ってしまったことが、狂った世の中になった原因のひとつといえるでしょう。



「唯、心所現」我々の心の様相が現実をつくつていっているように、内なる心や想いを変える以外にこの不安、不信の世の中を変えることは出来ないでしょう。我々が、かつて経験したことの無い人口減少の社会で、経済中心の考え方では、ますます不安はつのりします。

先日、シャボン玉石齋の森田社長の友の会だよりの中で、「吾唯足知」「われただ足りるを知る」という記事を読んで、我が意を得たりという心境です。物や金のみを求めらるゝはなくて、内なる心や魂の安らぎを必要とする時代です。忘れていた人生の指針となる「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」の八つの珠を思い起こし実践することが、明るい未来に続く道だと確信します。

## 「善玉」と「悪玉」

古来から人間は性善説か、性悪説かということで議論が続きましたが、それは二者択一ではなくて、人間はそのどちらも持つておりどちらが強く現れるかと言うことです。ある時は「善玉」が、ある時は「悪玉」が現れます。

近江の長浜で、木下藤吉郎と豊臣秀吉は別人であるといわれるように、希望に燃えて目的に向かって進んだ若い時は、善い政治を行い、人々も幸福であったのですが、やがて天下人となった秀吉は、人が変わったように悪い政治を行ったのでしょう。

その逆に多くの人が命を失った山國川沿いの鎖渡しという難所に、二十一年間に涉って洞窟を掘り続け、青の洞門というトンネルを完成させた「了海禅師」の前半生は市九郎という悪行の限りをつくした人であることは、人には「善玉」と「悪玉」、光と闇の二面性を持つているということです。

人間は恐ろしくもあり、また変わって人の為に尽くすという期待も持っている訳です。

人の心が光に包まれるか、闇に覆われるかによって、大きく左右されるのかもしれませんが。どんな悪人だって「仏性」を持つている、魂の存在ということですよ。

「仏性」というまなざしで接することにより、非行少年も変わったたり、心を聞いて係われるようになったという話をよく聞きます。光と闇があるがままに受け止め、いかに光を引き出すか？それが大きなテーマですよ。

人は誰にでも心の奥底に輝く光を持っているのであり、その事を信じ豊かな明るい社会を創造することが使命ですよ。

## 「腑に落ちない」

腑に落ちるとか、どうも腑に落ちない（納得がいかない）という時に使われます。頭で分かっているけど心に刻印出来ない状態です。頭で分かっているけど、理解していても現実は、心で受け止めていなく、失敗することがたくさんあります。例えば我が国の人口が減少する社会が来るといふことは、頭で分かっているけど、それが納得がいかず、どんな社会が来るのか見えてきません。無意識の中に過去の人口が増加する社会に育っているのです。納得できないのです。

建設業界も戦後の焼野原から出発したので、住宅、工場、ビル、道路、港湾、ダム等々あらゆるものが新築され、業界は恵まれた環境にありました。戦後は一貫して、建設投資はGDPに対して比率は二十%を超える高い水準でした。

しかし、今年は十%前後であり、間もなく十%を割ることは明確です。

建築工事は新築工事が当たり前と思っていきましたが、今はリフォーム、リフレッシュが

建築工事に占める割合は二十%超える状態です。頭で分かっているつもりでも、心で受けとめ認識出来なければ、この事態には対応できません。我々の心の隅に過去の成  
功体験が残っていて、なんとかなるだろうとか、なんとかしてくれりとか、他に頼ったり  
という甘い気持ちになっっているのではないかと反省させられます。

政治家も経営者も教育者も我々国民すべてが真剣に考え、心で受け止め、行動せねばな  
らぬ問題が山積みされています。政治、経済、教育、医療等々試練ですが、腹をくくって、  
腑に落として、命がけで立ち向かわなければなりません。

頭で理解し、分かったつもりではなくて、五臓六腑の腑に落とし、心に刻印し、チャレ  
ンジすることが大切です。

## 比較の価値観

我々の価値観の基になっているのは、案外主体性のない、比較の価値観であることがあります。

例えば、あの人より、有名な学校を卒業した。あの人より大きな会社に入社した。あの人より大きな家に住んでいる。等々すべて他との比較によって価値の基準としていることがあります。だから比較するものがなかったら、貴男はなんですか？と問われたら自分自身が分からなくなるのです。

なんのために生を受けたのか？なんのために学校へいくのか？なんのために働くのか？目的もなく、ただなんとなく生きていることに反省させられますが、そうではなくて、一人ひとり目的があり、使命をもって生まれてきたこと、自分の願い、魂の願いがあるはずで、それを見出すことが必要です。

自分自身を振り返ってみても、損か得か？苦か楽か？プラスかマイナスか？勝ちか負け

か？など、自分の都合のいいように選んできたのですが、それは比較の価値観によって左右されたことに気づきます。

しかし、自分の魂の願いを成就するには、必ずしも楽を選んだことが正しいとはいえないことがあります。

試練が来るから気づくことがあり、試練に出会うことによって、従来の考え方や方法をかえることが出来るのです。

人生を他との比較によって生きて行くと、振り廻されて自分を見失うこととなります。まわりに左右されるのではなくて、確固たる中心軸を持ち、魂の願いに生きる人生を送りたいと念じています。

## 「成功」と「失敗」

「失敗は成功のもと」といわれ、失敗することが次の成功につながることであり、一度や二度の失敗で挫折することなく、チャレンジしなさいという教訓です。

本田技研工業の創業者である本田宗一郎さんは、「私は退任者の挨拶の中で、大過なくすごしたという言葉が、一番嫌いだ。自分が成功したのは1%。九十九%は失敗だった」という言葉に、あの偉大な本田宗一郎さんでさえ、人生には、たえず失敗がつきものであることを学び、勇気づけられます。

ある雑誌に「大過なく、まして功績さらになく」という川柳がありました。自分のことをいわれているようで、反省させられます。失敗を恐れずチャレンジすることが大切です。最近は「成功は失敗のもと」という現象も見受けられます。一度成功したことにより、何度もそれを期待して、同じ事を繰り返します。

いつも柳の下に泥鰌はいません。世の中が変化せず、ずっと現状が続くのなら、同じこ



とをやっても生き残っていけるかもしれませんが、目まぐるしく変化する現代社会では、過去の成功体験を固持すると、滅亡することになります。

商品の仕入れをする方が、「昔の成功体験が邪魔をすることがある。若者の新しい発想を尊重せねば」といつていましたが、「成功は失敗のもと」というのも、なるほどと感じます。

ともあれ、失敗を恐れず成功に胡座をかかず、常に殻を破って成長することが、いつの時代にも必要な真理だと思います。



## 負（陰）の現実

人には、人生を生きて行く途中で抱かざるを得ない「負」の現実があります。「親との死別」「いじめに耐えた日々」「両親の離婚」「勉強が苦手だったこと」「容姿に対するコンプレックス」「失恋」「友人の裏切り」「受験の失敗」「事業の失敗」「リストラ」「子供の非行」「離婚」「家族の死別」「病气」数えあげれば、きりがないほどの試練が次々とあらわれます。この試練を正面から受け止めて対処することにより、いろいろな真意が見えてくる場合があります。

癌という病にかかり、そのことにより家族の絆を再結することが出来たとか、子供の非行により自分の考え方が間違っていたことに気がついたとか。自分が「癌」という病にかかって、はじめて患者さんの苦しみが分かったというお医者さんの話など、試練に出会ったことにより真意が理解出来ることがあります。その意味では試練は呼びかけであり、人生にとってマイナスだけではないこともあります。

先日、福岡県八女郡星野村の小林さんの「原爆の灯」のことが放映されていましたが、

はじめは爆心地の叔父の自宅を訪れた時に、焼跡に残り火が燃えていたので、「懐炉」に移し、「恨み」と「怨念」で保存し、いつか仕返しをする時にこの火を使うという目的で持ち帰ったそうです。しかし年月とともに、戦争という名のもとに、人の命を奪うということが、いかに残酷で理不尽なことか。戦争は二度と起こすことのないようにという心境で「平和の灯」として保存するようになり、晩年は子供達に平和の尊さ、ありがたさを説いてまわり、二度と原爆を使うことのない世界をめざし、子供達に自分の願いを託して、旅立って行かれたそうです。

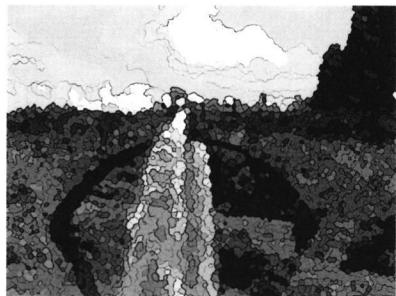
人生には、いろいろな試練が訪れますが、正面から受け止めて、それを乗り越えて、自分の使命を果すことを教えられました。

## バラバラの時代

最近の世の中は政治、経済、教育、医療、社会もバラバラに動いているような気がします。親子間、夫婦間、兄弟でもいろいろな事件が起こり絆が切断されています。企業でも、社内旅行、忘年会、花見等親睦事業の廃止やパソコン、メール、ネット等の普及により顔の見えない対話など知らず知らずのうちに人間関係が稀薄になってしまったからだという方がいます。また帰属意識がなくなつて、企業が生活の糧を稼ぐ場にしかなくなつていないし、多様化、個の時代が原因であるという人もいます。自分中心主義で、自分さえよければという「エゴ」が前面に出て他人のことを考えなくなつてしまい、本来日本人が持つていた責任感を失ってしまったのが問題であり、人間の「誇り」を捨ててしまい、迎合的になり、自分自身の存在価値を見失つてしまったからだともいわれます。その中で責任感を自覚し、自分の責任を果すということを、忘れてしまったことが大きく影響をしているのではないのでしょうか？

「こうなってしまった」「こうさせてしまった」前述の「こうなってしまった」というのは、責任を他に転嫁して、自分には関係ないということ。こうなってしまったのは、景気が悪かったから、上司や部下が悪かった、運がなかった、方向が間違っていた等理由付けをして、他に責任を背負わせていることです。

「こうさせてしまった」というのは、自分の責任として引き受け、反省し、そこが再生する道につながります。現在のこの事態を一人ひとりの責任として引き受け、反省し再生することを確信します。



## 「風」

風を起こす、風を読む、風を呼ぶ、新しい風、時代の風等々何か変化を期待する時。閉塞状態を破りたい時に、よく「風」という言葉を耳にします。肉眼では見えない風ですが、不思議な力を感じます。戦後それまで全く想像もつかなかった新しい風、時代の風が吹き込まれ、とまどいを感じたことを思い出します。その風が新しい時代。新しい社会に大きな影響を与え、新秩序を創造したことも間違いのない事実です。確かに、従来与えられなかった良い点もたくさんありました。

しかし、マイナスの面も最近よく目につきます。物事には光と影がありますが、現在は、影の部分がよく表れています。環境問題、温暖化、異常気象、物質中、心主義、拝金思想、自己中心的な考え方、格差社会、凶悪犯罪、家庭の崩壊、絆の切断等々これ以上放置できない限界にきています。

現実の社会の中での閉塞状態や硬直化したシステムを、新しい風を起こし、新しいエネ

ルギーを待ち望んでいる姿です。それは我々一人ひとりが、どんな人生を送りたいのか？  
真の幸福とはなんなのか？どんな社会をどんな国家を創造したいのか？今、大切にすべき  
ものは何なのか？閉め切った部屋の中で、窓を開けて新しい風を吹き込み、新鮮な空気を  
導入するように新しい風を起こし、後世のためになさねばならぬ使命だと確信します。



## 「価値破壊」

最近は、原油を中心とした原材料の高騰で、インフレ経済となり物価の上昇が続いています。数年前のデフレ経済の時は、安い外国からの輸入品を中心とした、ディスカウントショップ、百貨ショップ等々「価格破壊」という時代がありました。最近の、ものすごいスピードで変化する現象は、根底に「価値破壊」があるのでしょうか。それは政治、経済、文化、社会現象等々あらゆるところで起こっています。

身近なところでも、物の所有権に対する考え方も、所有するより使用权を選び、マンションを所有して固定化するよりも家族構成にあった賃貸アパートを借りた方が良いとする人がいます。車についても、高いガソリン代、駐車料、保険料、償却費等々、自分が所有するより、リースとかグループで所有するシステムで合理的な考え方に変っています。その他、結婚式、葬式、中元、歳暮、ファッション、レジャー、学歴に対する考え方も従来とは違った価値観を見出しています。



今年、自転車がよく売れたそうですが、これもガソリンの値上りだけではないようです。人口が減少する社会、だれも経験したことのない現実です。ビジネスにも全く違ったことが予想されます。政治もこの流れを受け止めねばなりません。従来派閥も液状化現象のように崩れ去って行きます。

時代の価値観、地域、年齢等の価値観の変化を認識することが必要です。今までの方法では、国民の信頼を得られません。

「価値破壊」の将来・共通の目的と共通の目標、それはまさに人間の原点が問われているのです。

## あとがき

この厳しい時代に、当社も世代交代を迎え、新たな船出をしました。

決して順風満帆な船出とは言えませんが、そんな時こそ、社員一人ひとりが一致団結してこの試練を乗り切る所存です。その為にも、私たちがこの本をバイブルとして、人生、仕事に活かして行きたいと考えております。

これからもわが社は、建設業を通して、社会に貢献してまいりますので、今後ともご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

また、今回、株式会社マツモト様をはじめ編纂、発行に係った方に、感謝申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

社長のひとこと（想いのままに） 編纂委員会

高藤 國雄

萬田 恵一

座木 恵子

（挿絵イラスト作成） 豊島 和司



# 想いつくまま

—30年間お世話になって—

---

発行日 平成21年6月11日  
発行人 高藤建設株式会社  
代表取締役 高藤元太郎  
〒800-8550  
北九州市門司区東新町1丁目1番30号  
電話 093-381-0461  
HP <http://www.takafuji.co.jp/>  
印刷・製本 株式会社マツモト